

成田山新勝寺門前町における街並み整備と商業空間の変容

橋本暁子・齋藤讓司・亀川星二・西田あゆみ
津田憲吾・井口 梓・松井圭介

キーワード：成田山新勝寺，門前町，新勝寺表参道，まちづくり，商業空間

I はじめに

「成田不動」「成田山」として人々に親しまれる真言宗智山派大本山成田山新勝寺（以下、新勝寺）は、開運招福、厄除け、交通安全等のご利益で知られ、明治神宮（東京都）、川崎大師（神奈川県）と並び、正月三が日には例年約300万人もの初詣客を集める全国的にも有名な寺院である。江戸中期頃より、現世利益の「お不動さま」として全国的に成田不動講が盛んに結成され、講員による団体参詣（成田詣）により、門前町は殷賑を極めた。周知のように、新勝寺の発展は、元禄期にはじまる江戸深川永代寺を中心とする出開帳と、江戸歌舞伎の影響が指摘される。成田屋を号した市川團十郎は不動信仰にも篤く、「成田不動利生記」の上演は江戸町民に人気を博し、成田不動尊の名声を高めた（角川日本地名大辞典編纂委員会編，1984）。出開帳の成功や江戸歌舞伎の影響を受け、江戸市中のみならず関東一円に成田講が組織され、それに連れて増加した参拝者を対象とした旅籠屋や飯屋、菓子屋などが営まれ、門前町の形成がみられた（普及版成田市史編集委員会編，1994；安藤，2003ほか）。

都市の成立史を考える上で、門前町のような宗教を核とする都市・村落は、日本のみならず世界各地で一般的にみられる都市の一形態である。エルサレムやメッカ、ルルドといった信仰や巡礼の

中心地をはじめとして、日本でも長野（善光寺）、宇治山田（伊勢神宮）、天理（天理教）など、宗教を核として成立した都市・村落は数多く存在する。藤本（1970）によれば、日本には約170の門前町があり、畿内から瀬戸内といった古からの先進地帯にその分布密度が高いことが知られている。

門前町の研究は、地理学をはじめとして歴史学ほか多様な分野から行われてきたが、藤本（1970：1-9）が指摘するように、地理学からは集落そのもの、すなわち門前町の形態や発達過程・位置・分布・都市構造・土地割り・家屋構造と、その現代的意義や現代社会への適応などが中心課題とされてきた（松井，1993）。門前町研究の流れを簡単に整理するならば、1950年代までの研究では、藤岡（1948）や原田（1957）らによる寺内町や門前集落における景観的特色に関する研究が主であった。続いて1960年代から1980年代にかけて、宗教と信仰集落の成立過程に関する研究が増加した。例えば浅香幸雄は一連の研究（浅香，1959；1963；1968）において、木曾御嶽、相模大山における信仰登山集落の形成要因や形成過程を、御師の宗教活動と檀家との結びつきという視点から分析し、さらに続報で富士北口の上吉田、河口の御師町の形態と構造に関する報告を行った。門前町と御師の活動形態からの考察は、相模大山だけでも鈴木（1966）や有賀（1971）などがある。この

ように宗教と集落との関係を、布教者の宗教活動の展開から考察する研究は、都市・村落に関する当時の宗教地理学の中心的研究であった。有賀はさらに、出羽三山や富士山麓における山岳信仰集落に関し同様な視点から分析を行った（有賀、1972；1974）。藤本（1968）は、宗教都市の地理学的研究を試みている。藤本は、宗教都市の位置と形態、成立と発展、機能と構造等に関して、門前の町屋と核になっている社寺との結合関係から考察を行った。藤本の研究以降、門前町の研究は、さらに出羽三山（岩鼻、1992）、宇治山田（船杉、1998）などが蓄積されている。

このように門前町は、社寺参詣者を対象とする商店や旅館などを核として町場化した集落であり、商業・サービス業に特化した集落としての特徴を有している。一方で、城下町起源の都市等と比較して一般に都市の人口規模や都市機能は小さく、中心となる宗教の盛衰の影響を受けやすいものと考えられる。

新勝寺表参道の場合、門前町であると同時に地方都市の中心市街地の商店街という性格も有している。日本の地方都市の中心市街地は、その存立基盤としての商業の空洞化などに伴う衰退が数多く議論されている。我々筑波大学人文地理学研究グループでこれまで研究を進めてきた茨城県水戸市（兼子ほか、2002）、常陸太田市（川瀬ほか、1998）、石岡市（高橋ほか、1994）、結城市（村山ほか、1996）、筑西市（新名ほか、2008）、古河市（岩間ほか、2004；兼子ほか、2004）、千葉県茂原市（新名ほか、2006）の事例においても中心市街地の商業機能の衰退に伴う、都心地区の空洞化は大きな課題であった。

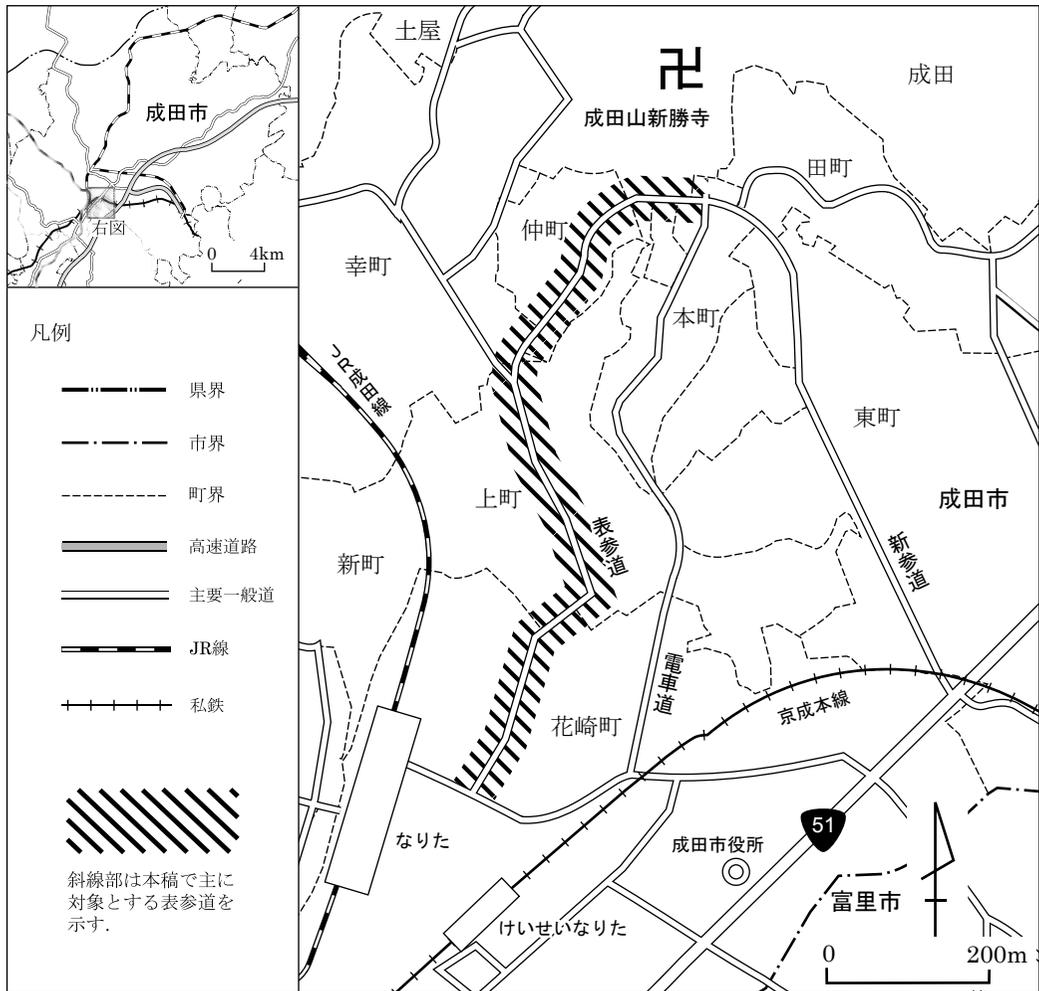
多くの地方都市では、社会・経済的環境の変化に商店会が対応することができず、再生への道筋が描けないというのが現状であった。しかしながら成田市の中心市街地の場合、これらの都市の状況とは異なり、空店舗が少ない。郊外への大型店の進出や中心市街地での住民の停滞といった各都市で看取された共通の要因が存在するにもかかわらず、中心市街地としての景観を保持している。

そこで本研究では、新勝寺の門前町における景観の変容を表参道地区に位置する商店の業種変遷に焦点をあてて論じる。具体的には、こうした業種の変遷がどのような社会・経済的背景のなかで生じてきたのか、またその景観変容に重要な役割を果たしたものは何か、という視点から、特に表参道地区で現在進行している景観整備事業に着目し、新勝寺門前町における商業空間の変容を明らかにすることを目的とする。

本研究で対象とする新勝寺の表参道地区は、成田市の中心部の市街地に位置する（第1図）。旧成田村は純農村であったが、新勝寺の興隆に伴って江戸中期以降、本宿（現、本町）、仲町、田町、台町（現、幸町、上町、花崎町）で門前町が構成された。本稿で扱う新勝寺の表参道は、仲町、上町、花崎町と、本町の一部、幸町の一部から構成され、新勝寺から近い順に本町、仲町、幸町、上町、花崎町の5町がJR成田駅まで連なる。本稿ではIV章を除き、表参道を構成する町として主に仲町、上町、花崎町について述べることにする。

新勝寺表参道の業種の変化に関しては、これまでも数多くの研究が蓄積されてきた（田中、1933；青野・尾留川編、1967；山田、1987；坂口、1991；川辺、1991；千葉県史料研究財団編、1999；西村、2000）。これらの中には、1907年と1999年、1930年と1986年、1965年と1997年の表参道の業種構成を比較した研究がある。しかし交通網の整備に伴う業種の変化、駅周辺と新勝寺周辺との業種構成の差異には触れられているものの、門前町を構成する各町の性格を考慮した変化は考察されていない。そこで本研究では、とくに各町におけるまちづくりの取り組みに着目する。

また本稿では、参拝客、参詣者、観光客、地元客の用語について以下のように扱う。参拝客は信仰心で新勝寺を訪れる者とし、講社による参拝、戦勝祈願、近世の参拝などを指す。参詣者は新勝寺に参詣することを目的として訪れる者を指す。観光客は参拝や参詣を除いて新勝寺や門前町を訪れる者を指し、団体旅行の立ち寄りやトランジット客などを含む。地元客は門前町に買物を目的と



第1図 研究対象地域

して訪れる者を指す。

門前町を核として成立した成田村は、1886（明治19）年に町村制の施行により成田町となり、1889（明治22）年には郷部村、寺台村、土屋村を加えた。1954年には成田町と公津村、中郷村、久住村、豊住村、遠山村が合併して成田市が成立した。さらに2006年には成田市に香取郡下総町と大栄町が編入され、現在に至っている。

Ⅱ 成田山新勝寺門前町の歴史的展開

Ⅱ-1 1950年代までの門前町

新勝寺は、940（天慶3）年に寛朝によって開山された。朱雀天皇の勅命により、寛朝が京都高雄山神護寺の不動明王像を捧持して護摩祈禱を行い、平将門を平定したことに始まる（成田市史編さん委員会編、1986a）。本尊の不動明王は公津ヶ原に安置されたが、その後現在の米屋本店の敷地内と神明山を経て、1566（永禄9）年に寺台城主海保甲斐守三吉によって現在地に移された（成田市史編さん委員会編、1986a）。

新勝寺が全国的に知られるようになったのは、元禄期以降のことである。1700（元禄13）年に住職として迎えられた照範は、翌年から開帳を行い、特に江戸での信者を獲得していった（成田市史編さん委員会編、1986a）。成田山の開帳は、1701（元禄14）年以來、1857（安政4）年まで23回（居開帳8回、出開帳11回、巡業開帳4回）、近代には14回（居開帳9回、出開帳5回）行われた¹⁾。開帳には成田村の男衆を動員し、江戸まで行列を組んで向かうなど、成田村と新勝寺は結びつきがあった（成田市史編さん委員会編、1982）。開帳は、地元の成田村とのつながりを強くする一方で、信者の獲得や、本堂建立や修理に当てる資金の獲得など、寺院の発展にも欠かせない行事であった（成田市史編さん委員会編、1986a）。また、歌舞伎の市川團十郎が成田不動の靈驗記を演じたことも、成田山信仰が流布する契機となった²⁾。

新勝寺の名がとくに江戸で浸透するとともに、宝永期以降門前に町が形成された。享保期には町屋、うどんやそば切を売る^{けんどん} 餛飩屋、菓子屋、薬屋が立ち並んだ（成田市史編さん委員会編、1986a）。1831（天保2）年の「諸職人名前調書上帳」および1843（天保14）年の「諸商人軒数書上帳」（成田市史編さん委員会編、1976）から、8種類27人の職人と31種類123名の商人が成田村に確認できる。門前町の商職人に限られないものの、成田村の賑やかさをうかがい知ることができる。

江戸からの参詣は2泊3日で行われ、主に佐倉街道（千住-新宿-小岩-市川-船橋-佐倉-成田-寺台）が用いられた。寺台村は香取鹿島道の宿場でもあったが、成田村の繁栄により宿場機能が衰退した。門前町は本宿（現、本町）、仲町、台町（現在の幸町、上町、花崎町）、田町の4町で形成され、江戸からの参詣者を対象とした（成田市史編さん委員会編、1986a）。竜ヶ崎方面からの参詣者は土屋を経る裏参道を用いたため、隣村の土屋村にも旅籠を営むものがあった（成田市史編さん委員会編、1986a）。1858（安政5）年には江戸から成田までの名所案内記である『成田参詣記』が刊行されたことから、江戸から多くの参

詣者が訪れたものと考えられる。

近代に入ると、廃仏毀釈によって参詣者は一時期減少するが、1883（明治16）年頃に東京と成田を結ぶ乗合馬車が開通した。これを端緒として、1897（明治30）年には成田鉄道が成田と佐倉間、成田と滑川間、1901（明治34）年には成田と安食間、1902（明治35）年には成田と上野間で鉄道が開通した（成田市史編さん委員会編、1986b）。鉄道網の敷設によって東京からの日帰りが可能となり、参詣者が増加した³⁾。明治30年頃には、本宿、田町、仲町、横町（現、幸町）、上町、砂田（現、東町）に、上町から分離した花崎町を加えて「門前7か町」と呼ばれた（角川日本地名大辞典編纂委員会編、1984）。

坂口（1991）が示した「明治40年頃の私鉄成田駅前より門前通り迄の町並一覧表」によると、表参道に旅館、飲食店、土産物店が林立する一方で、上町には医院、呉服店、肉問屋、時計店、白米店など、花崎町には運送業、燃料店、理髪店、写真店、銀行など地元住民向けの店舗もみられる。この頃の門前町の盛況ぶりについて高浜虚子および芥川龍之介は以下のように記している。

高浜虚子「成田詣」（市原、1999）

「坂を上ると不動の山門が見える。道の左右には名物「栗羊羹」「凱旋おこし」白酒などを得る店軒を並べて其れについて多いのは「おかず有合せ飯屋」である。（中略）不動の前には三階造りの立派な宿屋が沢山軒を並べてゐる。」

芥川龍之介「佐原行」（市原、1999）

「路が大へん悪い。両側の店では黄色い聲を出して客をよんでゐる。羊羹をつんだ店や本家一粒丹と云ふ金看板をかざつた店や大きな〔座ぶ〕とん程の煎餅をぶらさげた店がせまい往来をはさんでゐる。」

表参道沿いには旅館、飲食店、羊羹やせんべいなどの土産物販売店が立ち並び、客引きの声が飛び交っていた様子を窺い知ることができる。さら

に1910（明治43）年から1911（明治44）年には、成宗電気軌道会社によって新勝寺と成田駅、成田駅と宗吾間が結ばれ、軽便鉄道によって成田と三里塚が結ばれた（成田市史編さん委員会編、1986b）。新勝寺と成田駅間が開通する際、人力車の車夫たちによる敷設反対運動に上町・花崎町の人々が加わり、本町や田町の下町では敷設運動を行ったため騒動となった（角川日本地名大辞典編纂委員会編、1984）。

大正期には、参詣者の増加に伴って門前町に映画館、芸妓屋、ホテルなどが開業した（旭、2005）。日帰り客の増加により、駅に近い花崎町や、駅と新勝寺の中間地点に位置する上町に店舗が開業する一方で、門前町全体で旅館業は衰退していった（成田市史編さん委員会編、1986b）。また鉄道の敷設により、講社による団体での参拝から個人による参拝に変化した。1933（昭和8）年に京成線が全通すると、社員旅行や小学校の遠足で新勝寺を訪れるようになり、新勝寺が観光地と化すとともに門前町は繁華街としての性格を強め、講社による参詣の比重が軽くなっていった（成田市史編さん委員会編、1982）。

第二次世界大戦中は、戦勝祈願のため鉄道を利用した参拝客がさらに増加したが、戦後は激減した（成田市史編さん委員会編、1986b）。1950年代後半に入ると、戦後の復興とともに再び参詣客の数が増加した。高度経済成長期以降、鉄道に代わって自家用車で訪れる参詣者が増加し、成田山に交通安全祈禱殿が設置された（成田市史編さん委員会編、1986b）。

II-2 参拝客の推移

1) 講社の変化

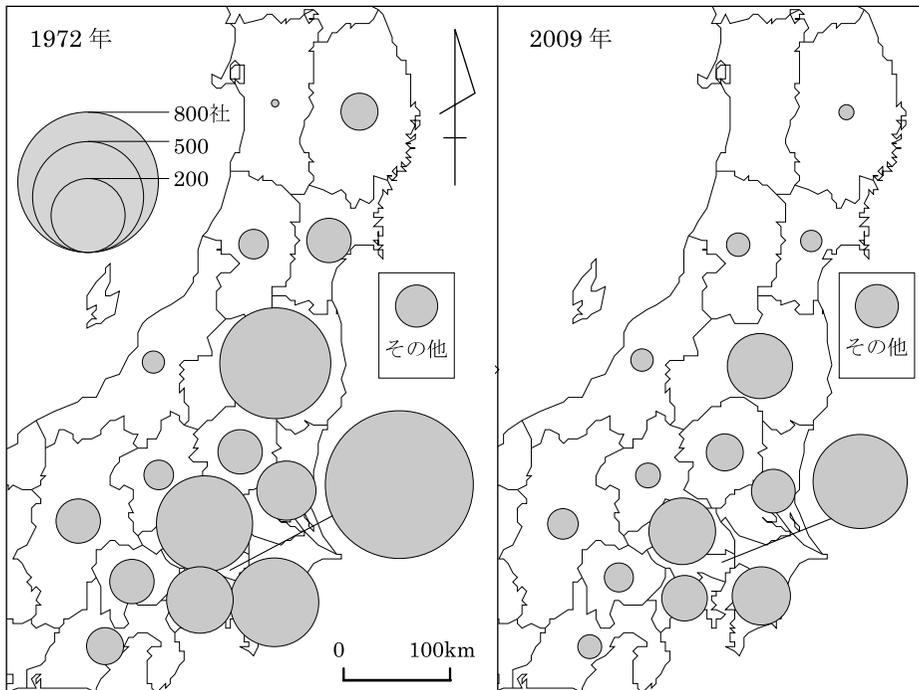
1805（文化2）年の「講中記」に記された414講は、江戸に322、千住宿などの在町に92講が分布した（成田市史編さん委員会編、1986a）。とくに江戸に講社が多いのは、江戸で開帳が行われたこと、市川團十郎家による「不動利生記」の上演により成田山の名が宣伝されたことに加えて、江戸から新勝寺まで3泊4日で参詣できる距離にあったた

めである。成田講は19世紀前半にかけて急増し、その分布域は嘉永期には武蔵、甲斐、安房、上総、下総、常陸、下野、上野、遠江、伊豆、信濃まで広まったという。講社の分布域が広域化する一方で、内陣五講、内陣十六講、浅草十講などのとくに新勝寺とのつながりの強い講も存在した⁴⁾。こうした講社が存在する深川（東京）や川越には成田山の別院が置かれ、成田へは代参で訪れた⁵⁾。

成田講は近代まで増加傾向にあったが⁶⁾、とくに1970年代以降は減少傾向にあるという（篠崎、2003）。そこで第2図に、『成田山講社・奉賛会名簿』と新勝寺提供資料を元に、1972年と2009年の都道府県別成田山講社数を示した。1972年の講社は代参講⁷⁾を含め2,935講である。東京都は最も講社数が多く858講（うち代参16）で、全体の29.2%を占める。次いで福島県487（16.6%、うち代参412）、埼玉県367（12.5%、うち代参100）、千葉県317（10.8%、うち代参50）、神奈川県163（5.6%、うち代参3）、茨城県138（4.7%、うち代参18）と続く。

2009年は1972年と同様の分布傾向が見られる。講社数は代参講および奉賛会⁸⁾を含め1,441講⁹⁾である。講社数は多い順に、東京都389（27.0%、うち代参3、奉賛会20）、埼玉県195（13.5%、うち代参0、奉賛会1）、福島県186（12.9%、うち代参136、奉賛会7）、千葉県149（10.3%、うち代参9、奉賛会22）、神奈川県91（6.3%、うち代参1、奉賛会2）となる。関東地方と福島県の講社の合計は、1972年で全体の79.4%、2009年で70.1%を占め、成田山の講社が東京をはじめとした関東周辺に多い事が分かる。一方で、東京の講社が戦時中に疎開し、疎開先で根付くことがあるという。福島に多い理由に、戦時中の疎開によるものが考えられる。

講の形態には以下の7種類がある。①地域住民の集まり、②会社の社員による集まり、③会社とその関連会社を含む集まり、④取引関係（傘下を含む）にある会社の集まり、⑤同じ業種同士の集まり、⑥先達の檀家、⑦選挙の後援会組織である。成田山の講社に登録されるための条件として、先



注1) 1972年講社数には代参講も含む。

注2) 2009年講社数には代参講および奉賛会も含む。

第2図 都道府県別成田山講社数(1972年, 2009年)
 (『成田山講社奉賛会名簿』(1972年)および「成田山講社名簿」(2009年)より作成)

達¹⁰⁾と講元¹¹⁾がいること、年1度の大護摩を行うこと、講員で登山すること、講員名簿を作成することが挙げられるが、現在では先達が存在しない講もある。先達が存在しない場合でも、講元が世襲である場合は講が存続する。

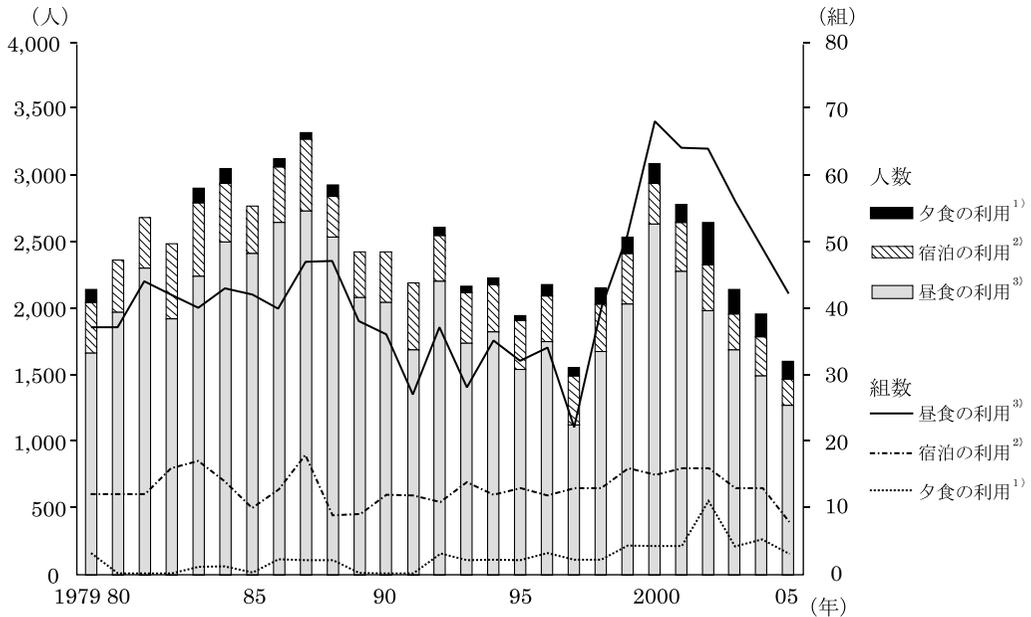
1972年から2009年の37年の間に講社数は約半数となったが、講が廃止された時期は把握し難い。講社数が減少した原因に、①鉄道の開業によって個人での参拝が容易になったこと、②先達の断絶、③地域内でのまとまりの希薄化、④講元の高齢化と若年層の不足、⑤門前町の旅館に駐車場が少ないことなどがある。また、講社数の減少とともに講員も減少しており、現在、講員数は平均して50人程度であるという。一方で、地域の有力者を中心として新たに結成される講もあり、近世から近代にかけて組織された講社とは性格が変化しつつあるといえる¹²⁾。

2) 講社による旅館の利用形態の変化

門前町の宿泊施設は交通網の発達に伴って減少してきたが、とくに講社数の減少と講社による参拝形態の変化と関わる。篠崎(2003)によれば、講社が宿泊する定宿は1885(明治18)年には61軒あったが、2003年では旅館業を営む店舗のうち、かつて定宿であった旅館は13軒のみである。これら定宿には、講社名と講員名が記された額が店先または店内に掲げられている¹³⁾。

本節では、かつて定宿であったA旅館を対象とし、第3図に1979年から2005年の1月にA旅館を利用した講社数の推移を示した。

まず組数では、いずれの年も昼食のみ利用する講社が最も多い。昼食のみ利用する講社は1979年から1986年までは安定して約40組の利用があったが、1987年から1998年にかけては20組台から40組台まで増減を繰り返し、1998年から2000年にかけては増加した。2000年には27年間のうち最も多い



第3図 A旅館の1月における利用講社数の推移（1979～2005年）

注1）夕食のみの利用を示す。

注2）昼食のみの利用を示す。

注3）夕食・朝食を含む宿泊の利用を示す。

（A旅館の宿帳より作成）

68組が利用したが、2001年以降は減少傾向にある。宿泊に利用する講社は、1985年から1988年にかけてやや増減はあるものの、安定して毎年13組程度の利用がある。夕食のみ利用する講社は、1999年以降やや増加傾向にある。

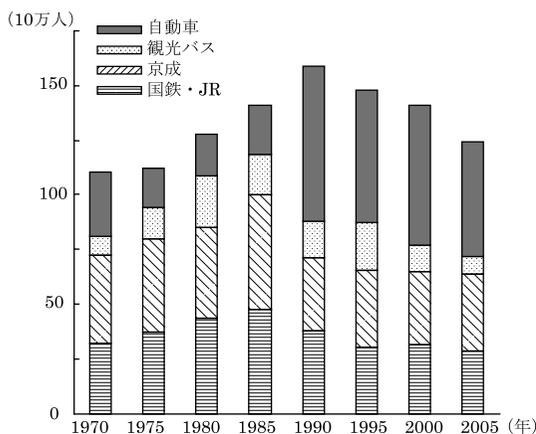
次に人数では1987年をピークに1997年まで減少傾向にあった。その後は2000年まで増加したが、再び2005年にかけて減少した。組数同様にいずれの年も昼食のみの利用が最も多く、全体の約80%を占める。1組当たりの人数は、宿泊は最大100人程度、昼食は250人程度であるが、平均すると宿泊の利用では29.6人、昼食のみの利用では49.0人である。講社1組当たりの平均人数は、宿泊の利用では1992年以降、昼食のみの利用では1994年以降減少している。講社そのものの規模が縮小傾向にあり、A旅館の利用客数に影響を及ぼしている。

3) 観光客の変化

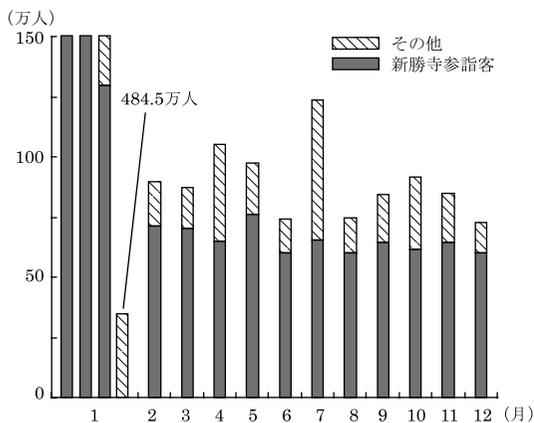
参詣者の目的には純粋な信仰心だけではなく観光することも含まれる。新勝寺を観光地として捉え、参詣する観光客もあることから、参詣者と観光客を明確に区別することはできない。また、門前町に限定した観光客のデータは存在しないため、ここでは成田市の観光客数を基に記述する。第4図には1970年から2005年の成田市における交通機関別の来客数の推移を示した。来客数は1980年から1990年まで増加した。観光バスによる来客数の増加も同時期に起こっている。1985年まで鉄道を利用した来客が増加傾向にあったが1990年には減少し、自家用車による来客が急増した。1995年以降、観光バスによる来客が大幅に減少し、2005年には1980年のピーク時と比較して約3分の1になった。その他の交通機関での来客も、1990年をピークに緩やかに減少傾向にある。講社の減少に伴って新勝寺への参詣者も減少していると考えられる。

第5図は2008年の月別の観光客数を示したものである。成田市に訪れる観光客の多くが、新勝寺への参詣者であることが分かる。そのため1月の観光客数が圧倒的に多く、他の月の4倍以上である。特に、正月三が日では290万人（2007年）の初詣客が新勝寺を訪れた。4月と7月は、太鼓祭と祇園祭が新勝寺および表参道で開催されることにより、観光客数が多くなっている。

成田ボランティアガイドの会や表参道沿いの店舗への聞き取り、アンケート調査によると、新勝



第4図 成田市における交通機関別来客数の推移 (1970~2005年)
(成田市観光プロモーション課資料および成田市統計書平成19年度版より作成)



第5図 成田市の月別観光客数 (2008年)
(成田市観光プロモーション課資料より作成)

寺を訪れる観光客は、50歳代以上が多い。団体客は犬吠崎や勝浦などをめぐる周遊観光の一部として来訪する。団体客の場合、バスを新勝寺近くの駐車場に駐車して新勝寺付近で買い物をするため、仲町より南側の地区はほとんど訪れることはない。一方、個人客はJR線や京成線を利用する場合もあり、上町や花崎町を経由する。また、個人客は日帰りが多いという。

成田国際空港（以下、成田空港）の開港以降は、外国人観光客が見られるようになった。成田空港の利用客や航空会社のクルーが頻繁に訪れる。国籍ではアジア系と欧米系がおおむね半数ずつを占める。新勝寺や門前町の日本らしい景観や和食が外国人を惹きつける魅力となっている。外国人観光客の増加に伴い、門前町の店舗でも様々な変化が生じた¹⁴⁾。花崎町では、特に夜になると飲食店に外国人が多く集まる。外国資本の飲食店も見られる。既存の飲食店でも英語表記のメニューを置くなど、外国人に対応している。地元客を対象とした店舗でも、店頭にだるまやまねきねこなど日本らしい小物を置く例がみられる。

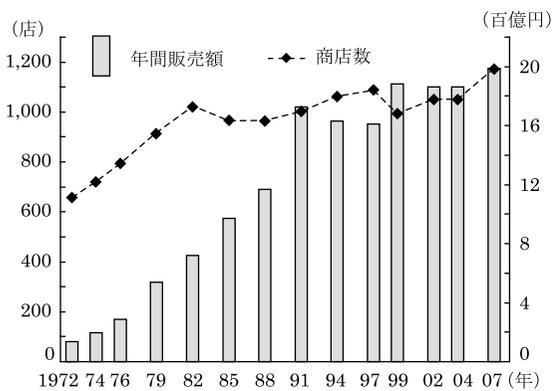
Ⅱ-3 第二次世界大戦後における成田市の商業環境の変容

1954年、成田市発足時の1店舗あたりの従業員数は24人で、業種は飲食料品を扱う店舗や土産物品の小売店、飲食店がほとんどであった（成田市史編さん委員会編、1986b）。成田市では、1960年代までは小規模な個人商店が商業の中心であった。

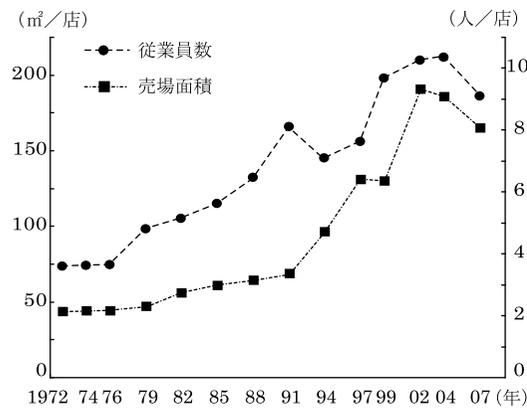
1970年代になると、成田空港の開港、成田ニュータウンの造成やスーパーマーケットの進出などによって商業環境は大きく変化した。1970年代以降の成田市における小売業の動向を確認するため、第6図に成田市における小売店の店舗数と年間販売額を、第7図に小売店1店舗あたりの従業員数と売場面積の推移を示した。成田市における小売店の店舗数は、1980年代初頭までは増加傾向にあるが、1980年代以降になると増減を繰り返しながらほぼ1,000店前後で横ばい傾向にあり、2007年

には再び増加している。年間販売額では、1990年代初頭までは急速に増加し、1990年以降は増減を繰り返しつつも緩やかに増加している。一方で1店舗あたりの売場面積は増加傾向にあり、特に1990年代以降の増加が顕著である。1店舗あたりの従業員数は1990年代に一度減少したものの、1970年代後半から2004まで増加し、2004年をピークに2007年には減少した。2004年における1店舗あたりの従業員数は10.35人であり、成田市発足当初の4倍以上となった。

このような1990年代における1店舗あたりの売場面積や従業員数の増加、店舗の大型化の要因と



第6図 成田市における小売店の店舗数と年間販売額の推移(1972~2007年)
(商業統計より作成)



第7図 成田市における小売業1店舗あたりの従業員数と売場面積の推移(1972~2007年)
(商業統計より作成)

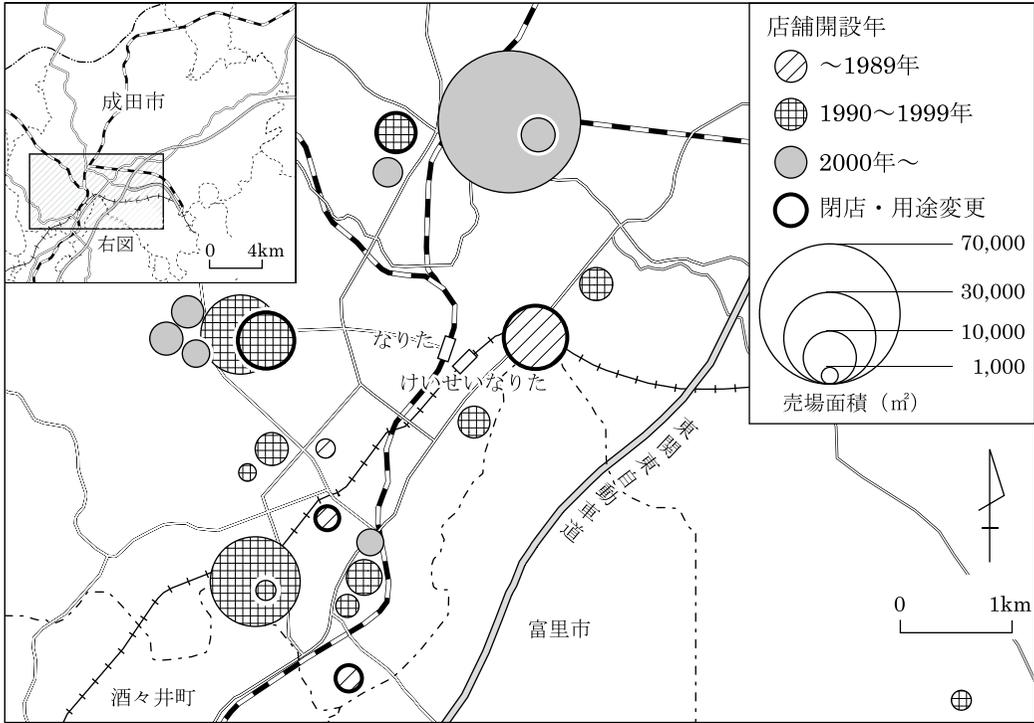
しては、大規模小売店(以下、大型店)の進出が指摘できる。成田市における大型店の立地は、主に1980年代から始まり、1990年代以降に活発化した(第8図)。成田市における大型店は、成田ニュータウンや京成線公津の杜駅周辺、三里塚などの郊外にのみ立地している。これらの大型店は2,000~5,000㎡の店舗面積で駐車場を備えた専門店が多く、10,000㎡の店舗面積を超える大型ショッピングセンターも目立つ。1990年代以降、大型店が多数開設された結果、成田市では周辺市町村からの買物客が増加し、2001年には総流入世帯数が千葉県内2位となった(駒木ほか、2006)。

次に成田市における主な商店会の分布を第9図に示した。商店会の多くは新勝寺門前町の参道沿いに集積しており、新勝寺境内にも2つの商店会が存在する。新勝寺門前町以外では、中心市街地の周辺や成田ニュータウン、宗吾霊堂の門前町、三里塚や豊住地区に分布する。新勝寺門前町と三里塚の商店会は会員数が多く活動が活発であるが、他の商店会は大型店に顧客が流出しほぼ機能していないという。

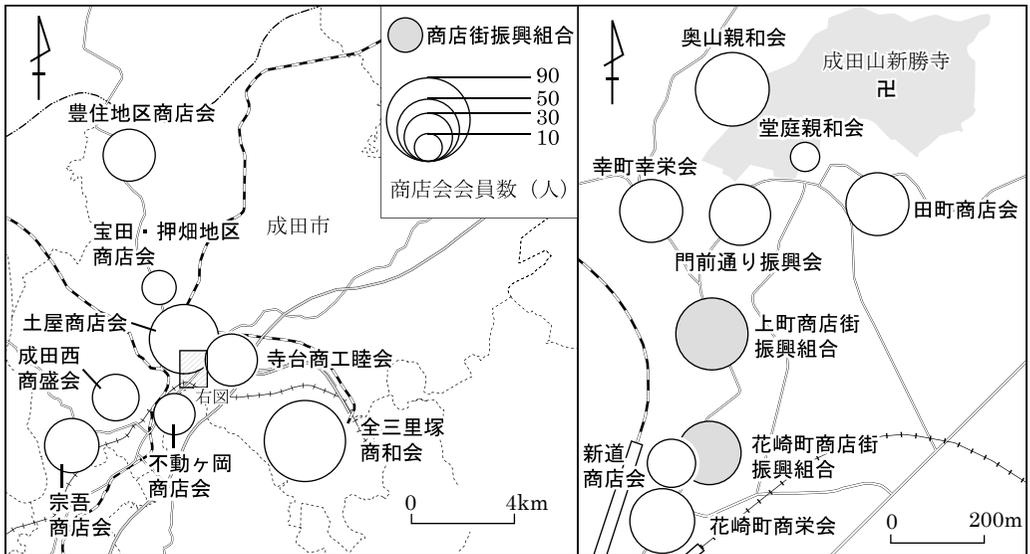
以上のように1990年代以降の成田市は、郊外では大型店の進出により周辺市町村から買物客を引き付けている。一方で、門前町を含む中心市街地では小規模な小売店が集積し、商店会が機能しており、中心市街地と郊外で異なった商業機能が形成されている。

II-4 成田市中心部における現在の土地利用

成田市中心市街地における機能を明らかにするため、第10図に成田市中心市街地の土地利用を示した。JR成田駅や京成成田駅周辺では大小のテナントビルや金融機関などの業務機能と、宿泊施設、飲食店が立地する。また京成成田駅の東側には月極の駐車場が多くみられる。新勝寺表参道では商業店舗とサービス業の立地が顕著である。商業店舗では小売店が多く、とくに菓子店や土産物販売店が目立つ。またサービス業の多くが飲食店である。表参道の中でも南北で土地利用に差がみられる。JR成田駅側では業務機能や住宅を含む



第8図 成田市における大規模小売店舗の開設年と売場面積（2009年）
 （成田市商工会議所資料より作成）



第9図 成田市における主な商店会の分布（2009年）
 （成田市商工会議所資料および「成田市中心市街地活性化基本計画」（2001）より作成）

テナントビル、居酒屋、パブ、スナック、飲食店、小売業では靴、かばん店や時計、眼鏡、貴金属店が多い傾向にあるが、新勝寺に近づくにつれて飲食店が多くなり、土産物販売店の立地が顕著になる。一方で表参道に面していない区画では、戸建住宅や居酒屋、パブ、スナックが多く分布するなど、通りに面する土地と面していない土地では大きく利用が異なる。

電車道と新参道沿いでは、表参道とは異なった利用が見られる。全体的に土地利用の規模が大きく、墓地や新勝寺関連施設と、月極、時間貸し、店舗用の駐車場が分布する。通りに面していない区画では、住宅、戸建住宅が多くみられる点で表参道と同様であるが、アパートやマンションなどの共同住宅が立地する点では異なる。

以上のように成田市中心市街地の土地利用は、駅周辺の業務機能、新勝寺表参道沿いの小規模な小売店の集積、表参道裏通りの居住地域と新勝寺関連施設や参詣客向け駐車場の立地が特徴である。また、全体的に空家や空店舗、空地はあまりみられない。セットバック事業が進行中の表参道以外では、ほぼ土地利用の改変が行われておらず、地方都市の問題とされる中心市街地の空洞化は確認できない。

Ⅲ 行政と表参道の町内会組織によるまちづくり

Ⅲ-1 行政によるまちづくりの支援

新勝寺表参道における景観整備事業は、1987年から開始された（第1表）。1987年に成田市は、成田市地域住宅計画推進協議会を設置し、表参道における電線等の地中化や、景観に関する指針を決定した。1990年に上町街づくり協議会が設立されると、成田市は1991年に整備計画調査を、1995年にはセットバック用地の購入方針などを決定し、街づくり協議会とモデル事業計画について協議を行った。これらの取り組みを経て、1996年に新勝寺表参道に対して街並み・街づくり事業等補助金交付要領が制定され、街づくり事業が開始された。

新勝寺表参道の街づくり事業は、主に電線類地中化事業、伝統的建築物等修景事業、セットバック事業、ファサード整備事業の4つが行われている（第2表）。電線類地中化事業は2000年から2003年にかけて表参道全体で行われ、景観の改善や、祇園祭の山車の通行が円滑になるなどの効果がみられた。伝統的建築物等修景事業は、1996年から戦前からの建造物が多い仲町で行われている。仲町は店舗の背後に山が迫り、表参道自体に約12%の傾斜があるという地形的条件からもセッ

第1表 表参道における景観整備事業の推移

年	場所	内容
1987	新勝寺表参道	電線等の地中化・景観についての指針を協議
1990	上町	上町街づくり協議会を設立
1996	仲町	伝統的建築物等修景事業の開始
1998	上町	セットバック事業・ファサード整備事業の開始
2000	花崎町	花一参道街づくり協議会を設立
2001	仲町	電線類地中化事業の実施
2002	中心市街地	中心市街地活性化基本計画の策定
2003	上町・花崎町	電線類地中化事業の実施
2004	花崎町	セットバック事業およびファサード整備事業の開始
2006	新勝寺表参道	まちづくり交付金による表参道街路整備の第一期事業（～2008）
2009	新勝寺表参道	まちづくり交付金による表参道街路整備の第二期事業の開始（～2013）

（成田市都市部市街地整備課再開発事業室資料より作成）

第2表 表参道における主な街づくり事業の概要

事業名	対象地区	概要
電線類地中化事業 (2000～2003年)	表参道	電線や電話線，光ケーブル等の地中化
伝統的建築物等 修景事業 (1996年～)	仲町	戦前に建設された建築物のうち，保全を図るべきものおよび， そのうち特に重要なものに対して，改修費や修繕費等の1/2から2/3 を助成
セットバック事業 (1996年～)	上町・花崎町	道路の両脇2mを買収，歩道として整備
ファサード整備事 業(1996年～)	上町・花崎町	セットバックした建築物に対して，建築物の正面を白壁、和風 看板、和瓦と整備することで，事業費の1/2（最大100万円）を助成

(成田市都市部市街地整備課再開発事業室資料より作成)

トバックが難しい。また住民の意向もあるため、伝統的な建築物の維持を中心としたまちづくりが行われている。セットバック事業とファサード整備事業は、上町と花崎町で1996年から行われている。これらの事業は、上町と花崎町の街づくり協議会を中心に事業実施場所や街並みへの適合の調整が行われ、成田市は街づくり協議会を通して助成を行う。これらの事業以外にも、表参道の空店舗を成田市が買収してポケットパークや観光施設を設置する計画や、歩道に干支を模した車止めを設置する事業が行われた。

表参道でまちづくりが進む中で、成田市は1998年の中心市街地活性化法の制定を受けて、2001年に中心市街地活性化計画を、2002年には成田市タウンマネジメント構想を策定した。これらの計画により、JR成田駅前や新勝寺門前町を含めた中心市街地での整備が進められている。

まちづくりに対する補助は、2006年までは全て成田市の財源によるものであったが、2006年にJR成田駅周辺地区が国土交通省によるまちづくり交付金の対象となったことで同時に行える事業が増加した。まちづくり交付金は使用用途に関する制限が緩く、成田市の裁量で様々な街づくり事業に利用することができる。まちづくり交付金事業は2006年から2008年にかけて第一期事業が行われ、2009年からは第二期事業が行われている。

現在成田市は、新勝寺表参道のまちづくりを行うと同時に、まちづくり交付金を利用したJR成田駅前の拡張工事や高度化事業を計画している。

今後は成田駅から新勝寺までの表参道の景観を統一し、国際観光都市としての街並みの整備を目指す。

また成田市では、観光客向けの対策として車両の交通規制と駐車場の管理も行っている。車両規制は、観光客が多く訪れる1月中およびイベント時、2月の日曜と5月、9月の土日の表参道で行われる。駐車場は表参道で3か所を管理する¹⁵⁾。自家用車を利用した客の増加に伴って成田山周辺には民間経営の駐車場が多く設置された。こうした駐車場が1日600円から800円であるのに対して、市営駐車場は3時間まで1時間100円と駐車料金が安い。地元住民による利用が多い。表参道は一方通行に規制されているものの、交通量が多く、表参道沿いの店舗の生活道路としても利用されているため、完全に車両規制をすることはできないという。

Ⅲ-2 表参道の町内会組織によるまちづくり

1) 仲町街づくり協議会

仲町では、仲町と本町による仲町門前通り振興会と、仲町と幸町による仲町街づくり協議会が組織されている。本項では、表参道のまちづくりのために組織された仲町街づくり協議会について述べる。仲町街づくり協議会は、仲町と幸町それぞれの商店会を母体として1990年頃に組織された。2009年現在の会員数は26人である。

2001年6月に、組合設立時の第一目標であった電線類地中化事業を竣工した。この事業に伴って

街路灯も撤去したことにより景観が整備された。今後は高さ1m30cmあるいは1m80cmの街路灯を15本設置する予定である。

仲町のまちづくりは、伝統や習慣を伝承していくことを理念とする。特に祇園祭に力を入れており、祇園祭で使用する山車は、先祖から受け継ぎ、子孫に遺していくものという意識を持っている。第11図には、仲町と幸町における重要保全建物と伝統的建物の分布を示した。成田市が伝統的建築物等修景事業に指定した建物のうち、重要保全建

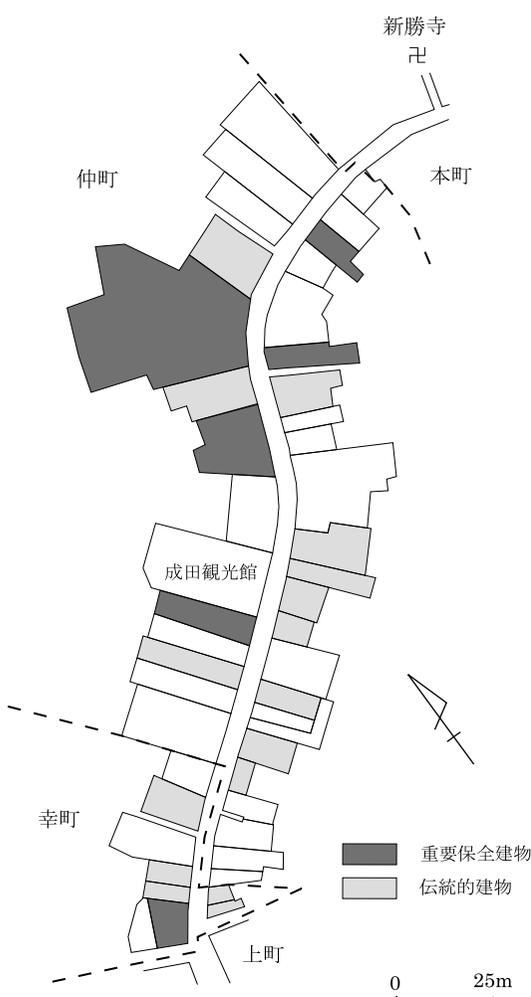
物が6軒、伝統的建物が16軒である（写真7～9参照）。いずれも薬局や元旅館であった建物が多く、門前町らしい景観をつくり出している。こうした建物の存在と地形的条件、住民の意識からセットバック事業は行わない方針である。一方でファサード整備事業は行われており、景観の維持に配慮している。門前町のなかでも早期に形成された町という意識が、仲町におけるまちづくりに貫かれている。

2) 上町街づくり協議会

上町は表参道の中でも早くからまちづくりに取り組み、1990年に街づくり協議会が、2002年には成田市で初となる商店街振興組合が設立された。現在商店会の会員数は67人であり、商店会の活動は活発である。

上町のまちづくりは、飲食店を経営するB氏を中心に進められた。B氏は大学を卒業後、1969年に上町の実家に戻り、父親の経営する飲食店を手伝った。当時の上町は、土産物店の他に最寄品や買回品を扱う店舗が多く、周辺市町村からも客が訪れていた。しかし1980年代以降、成田空港の開港によって店舗の後継者が空港関連業に就業したことや、大型店の立地による買い物客の減少によって、最寄品を扱う店舗を中心に廃業が相次いだ。こうした状況を受けて上町商店会では様々な販売促進活動に着手するも、継続的な効果はなかったという。

上町は新勝寺とJR成田駅および京成成田駅との間に位置するため、新勝寺に近い仲町や駅に近い花崎町のような一定の顧客の確保は困難であった。B氏は「何かしないと花崎町は客が通り過ぎてしまう」と考えたという。B氏は積極的に顧客を確保するため、1990年に上町街づくり協議会を設立した。設立初期にはまちづくりに関する勉強会を開催し、全国の商店会やまちづくりの視察を行った。その一方で上町内の各店舗にはセットバック事業や店舗の外観を統一する重要性を唱え、行政に対しては協力を求めた。1996年にはB氏は自らの店舗でセットバックとファサードの整



第11図 仲町・幸町における重要保全建物と伝統的建物の分布（2009年）
（成田市都市部市街地整備課再開発事業室資料および現地調査より作成）

備を行った。B氏と同年代の店主の協力により、次第に上町におけるまちづくりは進行した。2002年に上町商店街振興組合が設立されると、行政の補助も得やすくなり、まちづくりはさらに進化した（写真1）。

上町におけるセットバック事業およびファサード整備事業の進捗状況を第12図に示した。事業開始当初は、主に表参道の東側のうち中間地点でセットバックが行われ、2001年から2004年にかけては西側の中間地点で、2005年から2008年にかけては花崎町に近い南側で行われた。現在は約90%の店舗でセットバックとファサードの整備が完了している。セットバック事業やファサード整備事業により拡幅された歩道や整備された景観は、訪れる人の評判が良く2005年には国土交通省の都市景観大賞「美しいまちなみ優秀賞」を受賞するなど、上町のまちづくりはハード面では整いつつある。

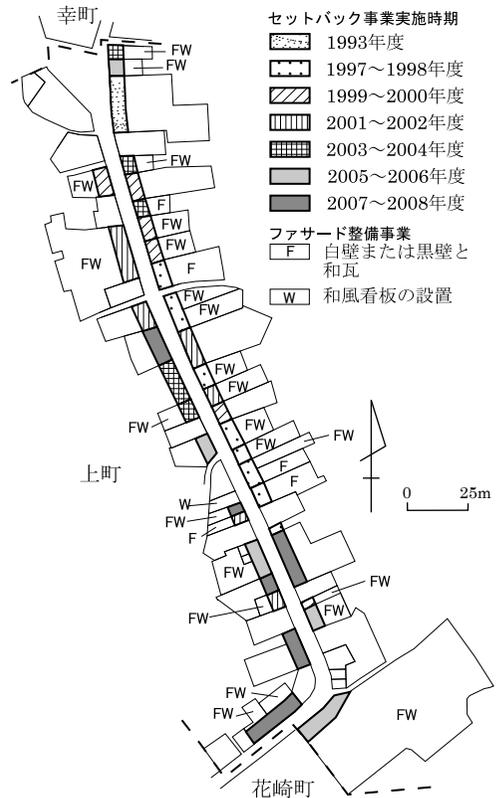
一方で、まちづくりに反対する経営者も存在し、全ての店舗でセットバックが行われているわけではない。さらに上町商店街振興組合には表参道沿いだけではなく、裏通りに立地する店舗も参加し



写真1 上町のセットバック事業およびファサード整備事業が行われた店舗

注) 石造りの椅子や干支の置物があるラインから店舗が2mセットバックされ、歩道が確保された。これに伴い通りに面した店舗の壁は白壁造りで屋根には和瓦を敷き、和風看板を掲げるファサード整備事業も実施された。

(2009年5月 橋本撮影)



第12図 上町におけるセットバック事業およびファサード整備事業の進捗状況（2009年5月現在）

(成田市都市部市街地整備課再開発事業室資料および現地調査により作成)

ている。裏通りは、表参道と比較して人通りが少なく、店舗の減少もみられる。上町商店街振興組合は、裏通りも含めて商店街を盛り上げていきたいと考えている。これらに加えて、まちづくりのソフト面での充実が今後の課題であるという。

3) 花一参道街づくり協議会と花崎町街づくり研究会

花崎町は1～5区で構成されており、そのうち表参道には、新勝寺側の花崎町1区と成田駅側の花崎町2区が面する。JR成田駅前の表参道入口から上町との境界までの約240mの区間である。花崎町は表参道沿いであると同時に成田駅前でもあるため、両方の性格を考慮したまちづくりが行

われている。街づくり協議会は、1区に花一参道街づくり協議会、2区に花崎町街づくり研究会が組織され、1区は隣接する上町との連続性を考慮したまちづくり、2区は駅前整備との整合を図ったまちづくりが進められている。

1区の花一参道街づくり協議会は1998年に設立された。設立当初は、商店街の売り上げ向上を目的として組織された。2002年から2003年にかけて実施された電線類地中化事業から本格的なまちづくりへの取り組みが開始された。電線類地中化事業によって景観が整備されたことで住民のまちづくりに対する意欲が増した。また、住民の中では、隣接する上町で進行中であったセットバックとファサードの整備が花崎町のまちづくりにも欠かせないという意識が広がった。そこで花一参道街づくり協議会では1区の店主にアンケートを配布し、電線類地中化事業に対する感想と今後のまちづくりの方向性に関する意向を調査した。その結果を受けて、2006年からセットバック事業、ファサード整備事業に着手した。

2区の花崎町街づくり研究会は、JR成田駅周辺市街地再開発を目的に組織された。当初は千葉興業銀行とその周辺の住民が中心となって、大型複合商業ビル建設のための区画整理に関する協議が始められた。1988年、再開発の範囲を2区の表参道東側全域に拡大することを条件に、行政からの支援が受けられるようになった。1990年には2区の表参道西側の地域も再開発に加わり、現在の花崎町街づくり研究会の形態となった。花崎町街づくり研究会は、再開発が行われた他地域の視察を中心に活動してきたが、2000年に行政からの支援が廃止されたことにより、2002年からは個人による店舗の建て替えを行うようになった。上町の景観が整備されるなかで、花崎町づくり研究会は、2005年に1区の花一参道街づくり協議会からセットバック事業とファサード整備事業を共同実施する要望を受け、2区でもセットバック事業とファサード整備事業に着手した（写真2）。

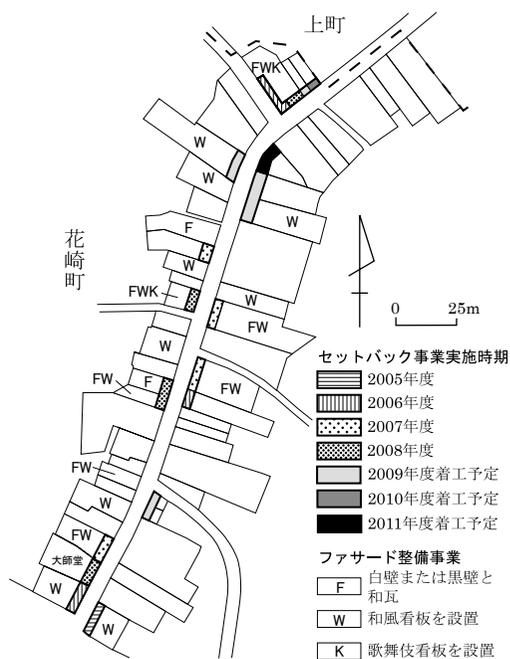
花崎町におけるセットバック事業およびファサード整備事業の進捗状況を第13図に示した。花



写真2 花崎町のセットバック事業およびファサード整備事業中の店舗

注) ファサード整備事業に伴い店舗の改装工事をしている。左隣の建物の道路設置面と比較すると、2mセットバックされた様子が分かる。

(2009年7月 橋本撮影)



第13図 花崎町におけるセットバック事業およびファサード整備事業の進捗状況（2009年5月現在）

（成田市都市部市街地整備課再開発事業室資料および現地調査により作成）

崎町の表参道沿いのセットバック事業は、1区2区ともに2005年から段階的に進められている。

2005年は1軒、2006～2008年は年間3～4軒のセットバックが行われた。2009年度は4軒がセットバックを実施予定で、2010年度と2011年度にはそれぞれ1軒の実施が決定している。セットバック事業は建物の老朽化の程度や、建て替え費用を行政が査定して順番を決定する。行政側は年間2軒のセットバックを行い、20年間をかけて事業を行う予定であったが、2006年度からまちづくり交付金によってセットバック事業への予算が増えたことで、2015年頃の完了が見込まれる。2009年5月現在までにセットバックが完了した店舗は12軒であり、セットバックのため建て替え中の店舗は1軒である。

ファサード整備事業はセットバック事業と同時に進行している。ファサード整備事業では、①建物の正面に白壁または黒壁の採用、②和風看板の設置、③和瓦の使用の3つを行うことを条件に、店舗の経営者に対して行政から上限100万円が補助される。和風看板はファサード整備事業以前から店先に掲げる店舗が多く、2009年5月現在、16軒が設置している。このうち白壁または黒壁を採用している店舗は9軒である。

駅から新勝寺までの表参道全体で景観の整備が行われる一方で、花崎町では独自に歌舞伎を利用したまちづくりを行っている(写真3)。これは江戸時代の歌舞伎役者市川團十郎に因む取り組みである。花崎町では、歌舞伎のパネルを店舗に取り付け、江戸時代より成田山が歌舞伎の上演により周知されてきたことを観光客にアピールしている。この取り組みは開始されたばかりで、2009年5月には歌舞伎のパネルを掲出している店舗は2軒である(第13図)。

Ⅲ-3 観光客への対応

1) 成田市観光協会による対応

観光客の誘致は、個々の店舗はもちろんのこと、成田市観光協会(以下、観光協会)の果たす役割も大きい。観光協会は旅館組合を母体として1984年に設立された¹⁶⁾。観光協会は総務、セールスプロモーション、IT、祭礼、フラワー、太鼓祭、キャ



写真3 花崎町の店先に掲げられたパネル
注) セットバック事業とファサード整備事業が終了した店舗で、市川團十郎が演じた演目の浮世絵が飾られている。1m×3mの陶板パネルである。

(2009年5月 齋藤撮影)

ンペーン、エアポート、花まつり踊りの各委員会に、特別委員会を合わせた10の専門委員会が組織されている。現在、約420団体が観光協会に加盟しており、加盟団体の多くは表参道沿いの店舗経営者である。観光協会に新勝寺も加盟していることが特徴の一つといえる。新勝寺の担当者は委員会に参加し、イベントの企画の段階から関わる。江戸期のみならず現在においても成田の観光に新勝寺が深く結びついていることを物語っている。また、成田空港も観光協会に加盟しており、元旦の航空安全祈願祭を観光協会が行う。成田空港が成田の観光に果たす役割は大きい。

観光協会の主な活動は、成田市の観光のホームページの作成を含めたPR活動、各種イベントの主催や協力、成田観光館(仲町)や観光案内所(JR成田駅東口)の運営である。以下、観光協会の役割について記述する。

(1) イベントの主催

第3表は、2008年に成田市で開催された主なイベントである。イベントの多くが観光協会の主催であり、新勝寺や表参道が会場となる。成田市では、^{しょうこく}正五九と呼ばれる1月・5月・9月の新勝寺の参拜月に観光客が集中する。第5図に示したと

第3表 成田市における1年間の主なイベント

月	名称	会場	主催	2008年来客数 (千人)
1月	初詣	新勝寺 他	新勝寺 他	2,900 ¹⁾
2月	成田山節分会	新勝寺	新勝寺	38
2～3月	梅まつり	成田山公園, 宗吾霊堂	観光協会	16
4月	おどり花見	新勝寺	観光協会	—
	成田太鼓祭	新勝寺, 表参道	成田太鼓祭実行委員会	200
	不動の大井戸茶会	なごみの米屋總本店内	観光協会	2.2
	伊能のおあそび (伊能歌舞伎)	大須賀神社	教育委員会	—
5月	平和の大塔まつり総踊り	新勝寺, 表参道	観光協会, 商工会議所	15
	成田山薪能	新勝寺	新勝寺	—
6～7月	宗吾霊堂紫陽花まつり	宗吾霊堂	観光協会	—
7月	成田祇園祭	新勝寺, 表参道	祇園祭実行委員会	430
	朝顔・ほおづき市	殖生神社	殖生神社	—
7～8月	うなぎ祭	市内各飲食店	観光協会	—
8月	滑河観音四万八千日	滑河観音 (龍正院)	滑河観音 (龍正院)	—
	成田ふるさとまつり	ニュータウン地区	ふるさとまつり実行委員会	—
	成田山みたま祭り	弘恵会田町駐車場	観光協会	—
9月	御待夜祭	宗吾霊堂	宗吾霊堂	50
10～11月	成田山菊花大会	新勝寺	新勝寺	—
10月	NARITA花火大会in印旛沼	印旛沼湖畔	NARITA花火大会実行委員会	50
	御利生祭	表参道, 西参道	商工会議所	90
11月	成田山公園紅葉まつり	成田山公園	観光協会	11
12月	納め不動	新勝寺	新勝寺	—

注1) 初詣は2007年の新勝寺の数値を示す。

注2) 「—」は不明であることを示す。

(成田市観光プロモーション課資料, 成田市観光協会HP および聞き取りより作成)

おり年間の観光客数は1月の参詣者に左右される。これを解消するため、年間を通してイベントを開催するようになった。

観光協会のフラワー委員会は、梅まつり、紅葉まつり、紫陽花まつりを主催する。梅まつりは2～3月の日曜・祝日、紅葉まつりは11月の土・日曜日に成田山公園にて行われる。茶会が開催され、二胡や津軽三味線、琴などが演奏される。紫陽花まつりは6～7月に宗吾霊堂の境内にて開催され、写真コンテストや茶会も行われる。宗吾霊堂に植えられた7,000株のあじさいの一部は、観光協会によって植樹されたものである。他にも5月には花まつり踊り委員会による平和の大塔まつり、7～8月には特別委員会によるうなぎ祭が開催される。

観光協会の主催ではないが、新勝寺と門前町の各町にとって重要な行事に祇園祭がある。祇園祭は、正式には祇園会と呼ばれ、祇園会は毎年7月7～9日に新勝寺で行われる。祇園会は、1721(享保6)年にはすでに行われていた。元々、新勝寺が管理する湯殿山権現社を中心とした祭礼であったが、時代の変遷と共に新勝寺の奥の院大日如来の祭礼へと変化した。

祇園祭は、新勝寺と成田山周辺の9町(本町、仲町、上町、花崎町、幸町、田町、東町、土屋、囲護台)の若者連¹⁷⁾を中心に、7月初旬の金・土・日曜日に開催される。祇園祭では新勝寺の御輿^{とぎよ}と山車(新勝寺、本町、仲町、花崎町、幸町、田町、土屋、囲護台)および屋台(上町、東町)¹⁸⁾の巡行が行われる。祇園祭の山車・屋台の引き廻

しは市内の広範囲において行われるが、中心となるのは新勝寺境内や表参道である(写真4)。特に、1日目の新勝寺の大本堂の前、2日目の成田駅前広場においてすべての山車と屋台が揃う「総踊り」や、3日目の門前から薬師堂までの仲町の坂を順番に威勢よく上る「総引き」が見どころで、多くの見物客が訪れる。山車と屋台の競演を盛り上げるものに囃子がある。囃子は、新勝寺・仲町・本町が「神田囃子」という江戸の囃子の系統¹⁹⁾であるのに対し、その他の町が「佐原囃子」という農村の囃子の系統である。どちらも成田独自の囃子ではないものの、同じ祭の中で異なる2つの系統の囃子が存在している例は少ない。

祇園祭の山車および屋台は各町内で管理されている²⁰⁾。それぞれの町が自分たちの山車や屋台に誇りを持ち、互いに対抗心も持っている。祭による町内の強い結束は、門前町内での町ごとの意識の違いにも影響している。

観光協会のうち、祇園祭を担当するのは祭礼委員会である。祇園祭は、土屋と囲護台を除く門前の7町が持ち回りで当番町を勤め、実行委員会を組織する。そのため、主催は観光協会の祭礼委員会ではなく、各町で組織された実行委員会である。しかし、当番町の補佐や、町間の意見の集約・調整を祭礼委員会が行う。観光協会の仕事は裏方で



写真4 祇園祭

注) 仲町の坂を駅方面に向かって山車を引き上げる様子。写真は成田山交道会の山車である。

(2009年7月 西田撮影)

はあるが、祇園祭を実行する上でも、町と町をつなぐ存在としても、重要な役割を担っている。

(2) PR 活動

観光協会が外に向けて行う観光プロモーション活動には、観光協会のホームページ²¹⁾の管理・運営や、キャラバン隊が行うキャンペーン活動、ガイドブックの作成などがある。

観光のホームページでは、英語・中国語・ハンゲルによる表示が可能で、イベントの情報や市内の観光スポット、成田市を代表する食事や土産物が紹介される。観光協会に加盟する店舗の経営者と共にIT委員会が各店舗のホームページを作成し、管理する。

キャラバン隊によるキャンペーンは、毎年12月の初めに関東近郊で行われる。会場は上野や大宮、千葉などターミナル駅前である。成田の土産物が紹介され、太鼓祭の太鼓や平和の大塔まつりの踊りが披露される。

(3) 成田観光館の運営

仲町に立地する成田観光館は成田市の施設であり、運営は観光協会に委託されている。観光情報の発信と休憩所としての機能を持ち、祇園祭の山車および屋台や成田の歴史の展示スペースを併設する。無料で利用できるパソコンはインターネットも利用可能である。年間約8万人が観光館を利用する。外国人による利用もあるため、英語での案内も行う。近辺の観光地として、外国人利用者には新勝寺を、日本人利用者には新勝寺の他に、成田空港周辺のさくらの山公園や航空科学博物館を紹介するという。

また、外国人向けに毎週木曜日の午前にティーセレモニーが開催されている。(写真5)。参加料が無料ということもあり、多い時で約20人が参加した。3人の職員が英語で行い、お茶の作法は茶道の経験のある職員が行う。外国人向けの対応も充実しているといえる。



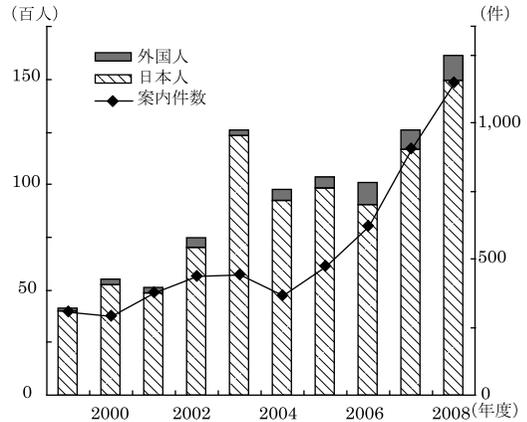
写真5 ティーセレモニーでの内掛け体験
注) ティーセレモニーに参加した外国人が内掛けを着てスタッフと記念撮影をする様子。

(2008年10月 亀川撮影)

2) 成田ボランティアガイドの会による対応

成田市観光協会の他に、成田における観光客の受け入れ態勢として、成田ボランティアガイドの会の活動がある。成田ボランティアガイドの会は、千葉県からの要請により1998年に成田市の老人クラブを元に組織された。ボランティアガイドは、当日または事前の申し込み客に対して新勝寺の境内を中心に1～2時間のガイドを無料で行う。ボランティアガイドは成田ボランティアガイドの会に所属する約45人で行われる。ボランティアガイドは信徒会館に2人と境内に1人が常駐している。ボランティアガイドの利用者は、2人以上であればその場でボランティアガイドを申し込むことができる。

第14図にボランティアガイド利用者の推移を示した。その件数、利用者数ともに増加しており、外国人利用者の増加が目立つ。外国人の利用者は成田空港を利用する旅行客や、トランジット客の場合が多い。その出国国籍は、アメリカが多く、他にはカナダ、ロシア、ノルウェー、オーストラリア、アジアでは中国、韓国、台湾、タイからの利用がある。外国人への案内は、外国人対応専門のボランティアガイドによって英語で行われる。専門のボランティアガイドは外国での居住経験者や教師経験者など、英語が堪能な人が務める。



第14図 成田ボランティアガイド利用者数の推移 (1999年～2008年度)

(「平成21年度ボランティアガイドの会総会資料」より作成)

IV 新勝寺表参道の商業空間の変容

表参道を構成する各町は成立時期が異なるため、対象とする顧客や業種に差異がみられ、町ごとに門前町として、表参道としての意識やまちづくりへの姿勢が異なる。また1970年代以降は成田空港の設置や大型店の展開に伴って、門前町の業種構成も大きく変化した。そこで第15図に1970年、1985年、1996年、2009年の4時点における表参道沿いに立地する店舗の業種構成を復元した。

IV-1 本町・仲町

1) 業種構成の変容

(1) 本町

1970年は5軒中、旅館業1軒、飲食業2軒、土産物販売業2軒で、いずれも新勝寺への参詣者向けの業種とみられる。1985年と1996年でも変化はなく、2009年に土産物販売店1軒が撤退したことで、全体で4軒となった。本町全体では1970年から2009年にかけて旅館と飲食店の減少と、土産物販売店の増加がみられる。第4図に示した鉄道利用者の減少と自家用車利用者の増加の影響として、門前町で昼食をとる参詣者が減少し、土産物購入者が増加したためと推察される。しかし表参道沿いに立地する店舗では、ほぼ業種変化がみら



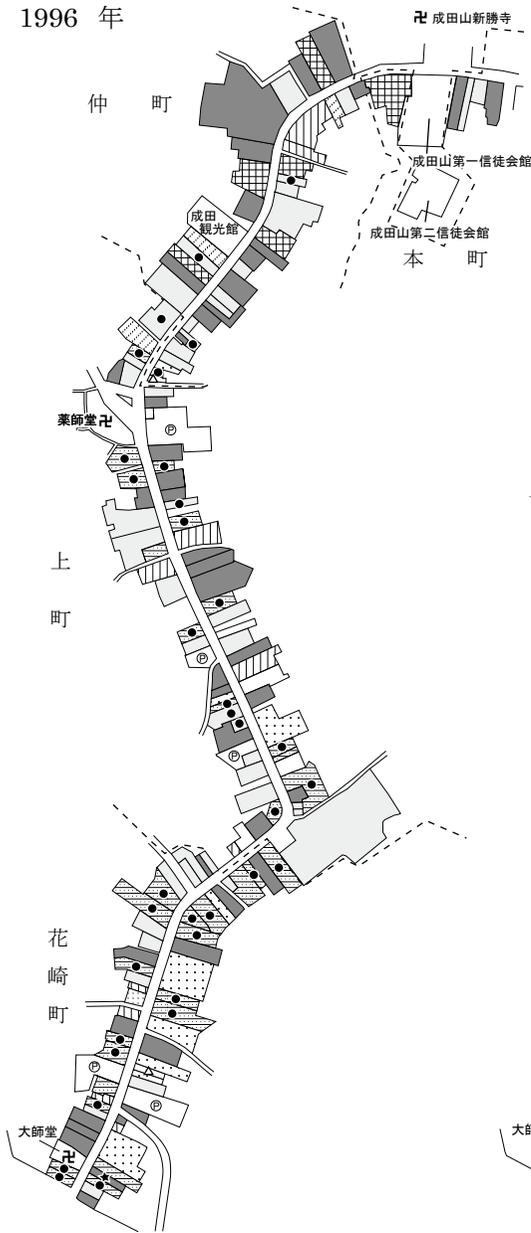
第15図 新勝寺表参道における業種構成の変化
(1970年, 1985年, 1996年, 2009年)

注1) 2009年の図は, 2009年5月31日の状況を示す。

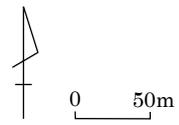
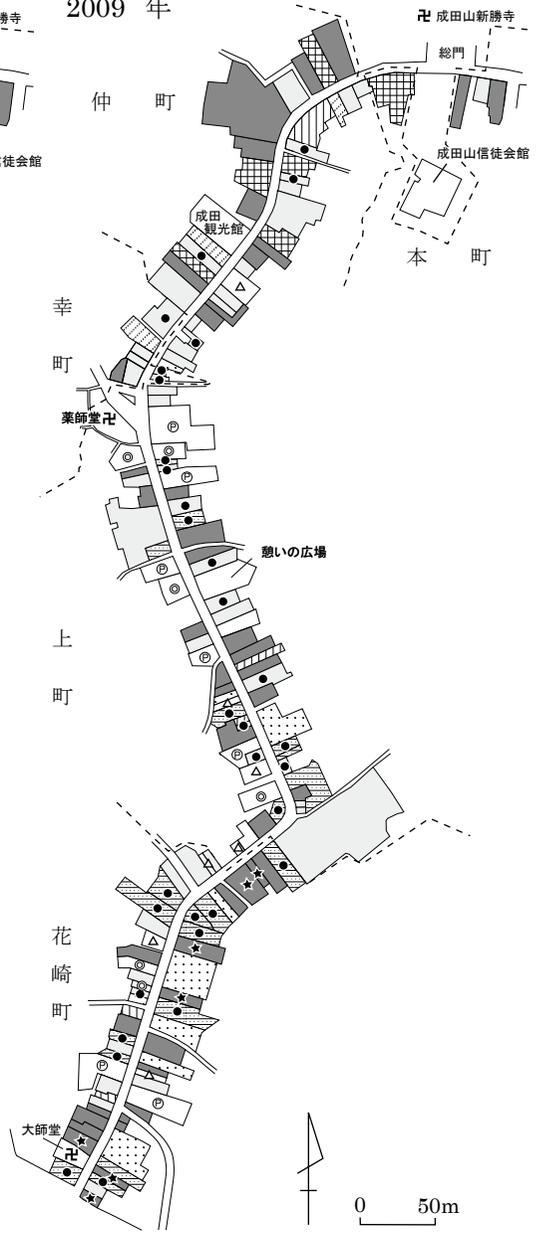
注2) 各年度における町の境界は, 動態図およびゼンリン住宅地図を元にした。

(『千葉県成田市動態図鑑 昭和45年度版』および, 1985年度版, 1996年度版, 2008年度版のゼンリン住宅地図を元に, 聞き取り, 現地調査を行い作成)

1996 年



2009 年



凡例

- | | | | | | |
|--|------------|--|-------|--|-----|
| | 旅館 | | 薬局 | | 建設中 |
| | 飲食店 | | 衣料品店 | | 空店舗 |
| | 飲食店 (夜間のみ) | | 食料品店 | | 駐車場 |
| | 土産物店 (食品) | | 生活雑貨店 | | その他 |
| | 土産物店 (雑貨) | | サービス業 | | |

れない。

(2) 仲町

1970年は32軒中、旅館8軒、飲食店8軒、土産物（食品）販売店9軒、土産物（雑貨）販売店2軒、薬局2軒、洋品店3軒であった。2軒の薬局と1軒の洋品店は、参詣者を対象として開業したものであり、既に明治期には営業していたことが確認される（第17～20図および写真6～9参照）。薬局と洋品店が参詣者向けであるとすれば、32軒中30軒は参詣者向けであったといえる。

1985年には、薬局の倉庫を利用して土産物販売店が併設されたことにより、仲町全体で33軒となった。1970年には8軒であった旅館業のうち2軒が飲食業へ業種変更したことにより、旅館6軒、飲食店10軒となった。

1996年では、成田観光館に隣接した土産物（雑貨）販売店が撤退したことで、全体で32軒となった。旅館業および土産物（食品）販売業から各1軒が飲食業へ業種変更し、洋品販売業が1軒土産物（食品）販売業へ業種変更したことにより、旅館5軒、飲食店12軒、土産物（食品）販売店9軒、土産物（雑貨）販売店2軒、薬局2軒、洋品店2軒となった。

2009年は全体として31軒で構成されている。旅館の数は1996年と変わらないが、飲食業のうち1軒が空き店舗、1軒が土産物（食品）販売業に業種変更し、1軒の洋品販売業が土産物（雑貨）販売業に業種変更した。これにより31軒は、旅館5軒、飲食店10軒、土産物（食品）販売店10軒、土産物（雑貨）販売店3軒、薬局2軒、洋品店1軒で構成される。

仲町では、1970年時点で飲食店であった店舗のうち、旅館の造りを残す店舗がみられる。鉄道や自家用車を利用した参詣者の増加により、既に1970年以前に旅館数は減少していたが、その傾向は1970年以降も続いた。2009年現在旅館業を営む5軒も、旅館業のみの営業ではなく昼間の飲食業を兼ねる。飲食店は1996年時点までは増加傾向にあったが、2009年には減少した。一方で、薬局と

土産物販売店は1970年から2009年まで店舗数にはほぼ変化がみられない。仲町では土産物販売店のうち、雑貨を扱う店舗に比べて食品を扱う店舗の数が多く、主によくかん、せんべい、漬物などを販売する。成田名物と知られるよくかんや、店先で焼き立てのせんべいの香りに魅せられる客は多い。薬局では2軒ともに店主が調合した一粒丸が売られる。一粒丸もよくかん同様に成田の名物とされており、今後も業種変更の可能性は低いと考えられる。

2) 現在の店舗形態

第4表に、2009年5月に行った聞き取りおよびアンケートの集計結果を示した（アンケート参照）。本町・仲町の32軒中23軒（71.9%）の回答を得た。以下、開業年代、営業時間、客層、土地と店舗の所有形態について述べる。

最も開業年代の古い店舗は江戸期の開業で、8軒が該当する。飲食店は、7軒中3軒は江戸期の開業で、従来は旅館業を営んでいた。また1軒は明治期から戦前にかけて、3軒は1940年代から1950年代にかけて開業した。飲食店は、7軒中6軒が高度経済成長期以前に開業した。1970年以降に開業した店舗は4軒で、本町・仲町では半数以上が戦前の開業である。

営業時間は、やや早く開店する店舗は土産物販売店で、8時半から10時頃には営業を開始する。飲食店はやや遅れて9時から10時頃開店し、昼食をとる参詣者を対象とする。飲食店7軒のうち4軒は18時までに閉店し、2軒は21時から21時半頃に閉店する。土産物販売店は17時には閉店する。多くの店舗では、新勝寺への参拝客が増加する正五九や、祇園祭などのイベントの際は営業時間を延長するという。

客層は、地元客が多く訪れる店舗は3軒あるが、主な客は観光客である。その要因として、①新勝寺から近いこと、②大型観光バスの駐車場からも近いこと、③土日は本町から幸町にかけて車両規制を行うことなど、立地条件と制度的条件で参詣者が利用しやすい状況にあるためといえる。

第4表 本町・仲町における店舗の構成と形態（2009年）

番号	業種	開業年	営業時間		客層			店舗改装		所有形態	
			開店	閉店	地元客	観光客	外国人	改装年	理由	土地	店舗
1	旅館	江戸期	7:00	16:00		○		1976	老朽化	1	1
2	旅館	江戸期	9:00	18:00		○		1985	食堂の開店	1	1
3	旅館	—	9:00	17:00		○		明治、大正	業種変更	—	—
4	旅・飲	1950	10:00	16:00		○		1985	旅館利用者の減少	2	1
5	飲食	江戸期	9:00	16:00		○				2	1
6	飲食	江戸期	10:00	17:00	—	—	—			2	—
7	飲食	江戸期	10:00	21:00	—	—	—	毎年	少しずつ改良	1	1
8	飲食	1910	10:00	17:00		○	○	明治末期	旅館の廃業	2	—
9	飲食	1945頃	9:00	21:30	—	—	—	1981	空港利用客への対応	1	1
10	飲食	1950	10:00	不定	○	○	○			1	1
11	飲食	1980	10:00	18:00		○	○			1	1
12	土・雑	1970	9:45	17:00		○	○	1976・1993	—	2	1
13	土・雑	—	9:30	17:00	○	○	○			2	2
14	土・食	1890	9:00	17:00		○		1991	—	1	1
15	土・食	1905	10:00	17:00		○				1	1
16	土・食	1912頃	9:30	17:00		○		2007	老朽化	1	1
17	土・食	1980	9:00	15:30		○				2	2
18	土・食	1980	9:00	17:00		○		—	内装の改装	1	1
19	土・食	—	8:30	17:00	○			1980頃	建て替え	1	1
20	土・食	—	10:00	17:00		○				2	2
21	薬局	江戸期	9:00	17:00	—	—	—	1952・1973	—	1	1
22	薬局	江戸期	9:00	19:30		○		1860・1984	焼失・時代への対応	1	1
23	衣料品	江戸期	9:30	18:00	—	—	—	1970・2005	利用者への利便性の考慮	1	1

注1)「旅・飲」は旅館業と飲食業を兼業していることを示す。

注2)「土・雑」は雑貨を扱う土産物販売業、「土・食」は食品を扱う土産物販売業を示す。

注3)「—」は不明であることを示し、「(空白)」は該当しないことを示す。

注4)「客層」の「観光客」には、参拝客および参詣者を含む。

注5)「客層」の「○」は、主に利用する客層を示す。

注6)「所有形態」の「1」は自己所有、「2」は借地または借家であることを示す。

(聞き取り調査およびアンケート調査より作成)

所有形態では、63.6%が自家で土地を所有し、85.0%が自家で店舗を所有する。テナントは上町、花崎町と比較して少ない。土地の自家所有率がやや低いのは、新勝寺が所有する土地が含まれるためである。

IV-2 上町・幸町

1) 業種構成の変容

(1) 上町

上町は町境の変更が度々行われ、第15図では1985年と1996年に花崎町との境が変わり、2009年には幸町²²⁾との境界が示されている。

1970年は76軒中、旅館1軒、飲食店20軒、飲食店(夜間のみ)1軒、土産物(食品)販売店19軒、薬局2軒、衣料品店4軒、食料品店5軒、生活雑

貨店19軒、サービス業3軒、その他2軒であった。飲食店や土産物(食品)販売店などの観光客向けの店舗と、生活雑貨店などの地元客向け店舗が混在していることが分かる。

1985年は、花崎町と上町の境界が変わったため全体で66軒となった。銀行の来客者用の駐車場が新たに設置され、車社会に対応した整備が行われた。依然として飲食店、土産物(食品)販売店と生活雑貨店が多い。

1996年は63軒中、飲食店16軒、土産物(食品)販売店15軒、土産物(雑貨)販売店4軒、薬局1軒、衣料品店4軒、食料品店2軒、生活雑貨店11軒、サービス業2軒、駐車場3箇所、その他5軒である。1985年と比べて飲食店が21軒から16軒に減少し、それらは駐車場や土産物(食品)販売業、土

産物（雑貨）販売業に業種変更した。また、1985年までには見られなかった土産物（雑貨）販売店が出現し、地元客を顧客とする業種が減少した。駐車場は3ヵ所になり、薬師堂の向かいに大型の市営駐車場が整備された。

2009年5月現在の店舗数は58軒である。飲食店15軒、土産物（食品）販売店9軒、土産物（雑貨）販売店8軒、衣料品店2軒、食料品店3軒、生活雑貨店5軒、サービス業2軒、駐車場5箇所、建設中4軒、空店舗3軒、その他2軒で構成されている。土産物（食品）販売店と生活雑貨店が減少し、一方で土産物（雑貨）販売店と駐車場が増加した。建設中の店舗はセットバック事業によるものである。

上町では、1996年までは地元客向けの店舗が多かったが、2009年では最寄品店が減少し、観光客向けの店舗がやや増えつつある。

(2) 幸町

幸町部分の店舗は8軒中、飲食店1軒、土産物（食品）販売店3軒、土産物（雑貨）販売店3軒、薬局1軒である。1996年時点までは地元客を対象とした店舗が多かったが、2009年には食料品店、生活雑貨店のいずれもみられなくなった。一方で観光客を対象とした土産物販売店は食品店と雑貨店とともに増加した。昭和初期開業のサービス業店は2009年まで形態を変えずに営業しているものの、現在幸町では観光客に特化した業種構成であることが分かる。

2) 現在の店舗形態

第5表に、2009年5月に行った聞き取りおよびアンケートの集計結果を示した。上町と幸町の建設中・空き店舗・駐車場を除く56軒中42軒（75.0%）から回答を得た。

最も古い店舗は江戸期の開業で2軒あり、いずれも飲食店である。明治期から戦前に開業した店舗は14軒あるが、戦後から1980年代までは少なく、合わせて5軒である。1990年代には4軒、2000年代には12軒が開業した。2000年以降に開業した店

舗は、土産物（食品）販売店3軒、土産物（雑貨）販売店3軒、飲食店2軒、衣料品店1軒である。営業時間は、8時半以前に開店する店舗が5軒あるものの、9時以降に開店する店舗が多い。飲食店を除く店舗は9時から10時半にかけて開店する。飲食店の多くが11時から11時半にかけて開店し、昼食をとる参詣者を対象とする。

閉店時間が16時半以前の店舗は4軒、17時から18時半までの店舗が25軒、19時から20時半の店舗が4軒、最も遅くに閉店する店舗は22時である。業種別にみると、土産物（食品）販売店、土産物（雑貨）販売店の多くが18時半以前に、地元客向けの店舗が19時半以前に、飲食店の半数が20時から22時に閉店する。和食以外の飲食店3軒は、いずれも20時から22時に閉店する。

客層はばらつきがあるが、観光客は飲食店、土産物（食品）販売店、土産物（雑貨）販売店、生活雑貨店に、地元客は飲食店、土産物（食品）販売店、衣料品店、生活雑貨店に、外国人は飲食店に多く訪れる。

改装を行った20軒のうち、7軒がセットバックを契機に改装した。

所有形態では、82.8%が自家で土地を所有し、85.7%が自家で店舗を所有する。土地、店舗ともに所有しない店舗は、土産物（雑貨）販売店と土産物（食品）販売店にみられる。

3) セットバック事業による業種の変容

1996年から行われているセットバック事業とファサード整備事業を契機に、上町の景観は変わりつつある。これらの事業は、景観だけでなく営業形態にも影響を与えた。例えばC店は戦前に開業した飲食店で、現在は70代の女性が経営する。通常は3名で営業するが、繁忙期には臨時のアルバイトを雇って営業時間を延長するなど、消費者のニーズに対応している。C店の来客者の多くが観光客で、成田空港の開港以降外国人も来客するようになった。C店は現在まで業種変更や店舗改装、移転などは行っていない。しかし、セットバック事業をきっかけに、業種変更と店舗改装を行い、

第5表 上町・幸町における店舗の構成と形態（2009年）

番号	業種	開業年	営業時間		客層			店舗改装		所有形態	
			開店	閉店	地元客	観光客	外国人	改装年	理由	土地	店舗
1	飲食	江戸期	11:00	17:00		○		1976	業種変更	1	1
2	飲食	大正期	7:00	17:00		○				1	1
3	飲食	1845	10:30	17:00	○	○	○			1	1
4	飲食	1930	11:00	17:00	○			1972	—	1	1
5	飲食	1933	11:00	22:00	○	○				—	—
6	飲食	1965	10:00	19:00	○	○	○			—	—
7	飲食	1966	10:00	22:00	○	○	○	2007	セットバック	1	1
8	飲食	1996	11:00	10:00			○			1	1
9	飲食	1999	11:00	20:00	○	○	○			—	—
10	飲食	2001	11:30	14:00	○					1	1
11	飲食	2003	11:00	17:00		○		2003	業種変更	1	1
12	飲食	—	10:30	20:30	○	○	○	1996	セットバック	—	—
13	飲食	—	11:00	22:00	○	○	○			—	—
14	土・雑	1948	8:30	18:00		○		1994	倉庫を店舗に拡大	1	1
15	土・雑	1989	10:00	16:30	—	—	—	2005	セットバック	—	—
16	土・雑	2007	9:30	17:30	○	○	○			2	2
17	土・雑	2008	9:00	17:00	○	○	○			2	—
18	土・雑	2008	10:00	18:00		○				2	2
19	土・食	明治期	10:00	16:30		○		2004	—	1	1
20	土・食	1872	10:00	18:00	—	—	—	2008	セットバック	1	1
21	土・食	1880頃	—	—	—	—	—			1	1
22	土・食	1912	9:00	17:00	○	○		1968	建て替え	1	1
23	土・食	1970年代	9:00	17:00		○		不明	建て替え	1	1
24	土・食	1991	8:30	17:00	○	○				1	1
25	土・食	2000	8:00	17:00		○		2000	セットバック	1	1
26	土・食	2005	10:00	16:00	○	○				2	2
27	土・食	2007	9:00	18:00	○	○	○			2	2
28	衣料品	1916	9:30	18:30	○	○				—	—
29	衣料品	1999	10:00	19:00	○			2008	セットバック	—	—
30	衣料品	2004	10:00	17:00		○	○			—	—
31	薬局	—	9:00	17:30		○				1	1
32	生活雑貨	大正期	10:00	18:00		○		—	焼失	—	—
33	生活雑貨	1936	9:00	19:00	○			1994	—	1	1
34	生活雑貨	2004	9:00	18:30		○		2004	—	1	1
35	生活雑貨	2005	10:00	18:30	—	—	—			—	—
36	生活雑貨	2007	9:30	17:30	○	○	○			—	—
37	生活雑貨	—	7:30	19:30	○			2004	—	1	1
38	生活雑貨	—	—	—	○					—	—
39	食料品	昭和初期	10:00	17:00		○				1	1
40	食料品	1940	9:00	17:30	○			1977	—	1	1
41	サービス	昭和初期	9:00	18:00	○	○	○	1981	建て替え	1	1
42	サービス	1930	9:00	18:00		○		2002	セットバック	1	1

注1) 「土・雑」は雑貨を扱う土産物販売業, 「土・食」は食品を扱う土産物販売業を示す。

注2) 「—」は不明であることを示し, 「(空白)」は該当しないことを示す。

注3) 「客層」の「観光客」には, 参拝客および参詣者を含む。

注4) 「客層」の「○」は, 主に利用する客層を示す。

注5) 「所有形態」の「1」は自己所有, 「2」は借地または借家であることを示す。

(聞き取り調査およびアンケート調査より作成)

50代の息子に世代交代をする予定である。

整備以外にも店舗の改装や業種形態の転換を行う

このように上町のセットバック事業は, 景観の

契機になっているといえよう。

IV-3 花崎町

1) 業種構成の変容

1970年は52軒中、旅館1軒、飲食店8軒、飲食店（夜間のみ）1軒、土産物（食品）販売店6軒、衣料品店4軒、地元客向けの食料品店8軒、生活雑貨店16軒、サービス業7軒、駐車場1箇所が立地している。地元客向けの生活雑貨店が最も多く、全体の31.4%を占める。また、八百屋や魚屋をはじめとする食料品店も多く、地元客向けの店舗は全体の68.6%を占める。飲食店は昼食を中心とする店舗が多く、夜間営業の飲食店は1軒のみである。店舗以外には成田警察署、金融機関や病院が立地し、商店街としての機能を有していたことが分かる。

1985年では、町境変更により上町に含まれていた5軒が花崎町に編入された。また、1977年に加良部地区に移転した成田警察署跡地に、飲食店が3軒立地した。地元客向けの生活雑貨店と食料品店が1つの市営駐車場になり、店舗数は54軒となった。1970年に8軒に過ぎなかった飲食店（昼間）は14軒に増え、花崎町商店街の業種で生活雑貨店に次ぐ店舗数になった。しかし、依然として地元客向けの店舗が商店街の半分を占めていた。

1996年には上町との町境が再び変更され、4軒が花崎町に編入された。58軒中飲食店13軒、飲食店（夜間のみ）1軒、土産物（食品）販売店11軒、衣料品店4軒、地元客向けの食料品店3軒、生活雑貨店16軒、サービス業が7軒、駐車場2箇所である。1985年と1996年では業種の変化はあまり見られないが、地元客向けの店舗が24軒から19軒に減少した。一方で観光客向けの土産物を販売する店舗は、6軒から11軒に増加した。飲食店と生活雑貨店が1つの市営駐車場になった。

2009年5月現在は57軒中、飲食店12軒、飲食店（夜間のみ）7軒、土産物（食品）販売店10軒、土産物（雑貨）販売店1軒、衣料品店2軒、地元客向け食料品店1軒、生活雑貨店11軒、サービス業6軒、駐車場2箇所、建設中の店舗2軒、空店舗3軒である。地元客向けの食料品店は減少を続け、現在では1軒のみである。一方で1996年に増

加した土産物販売店は2009年でも増加し、全体の22%を占める。夜間営業の飲食店は、1996年までは1軒であったが、2009年には7軒となった。これらの飲食店は、1996年まで地元客向けの食料品店や昼間の飲食店であった。大型店の開業による地元客の減少や成田駅からの近接性などの影響で、夜間営業の飲食業への業種変更が進行している。

花崎町では、1985年時点までは地元客向け店舗が6割以上あったが、1996年には観光客向けの店舗数が地元客向け店舗数を上回り、2009年現在は60.0%が観光客向けの店舗である。

2) 現在の店舗形態

2009年5月、花崎町表参道の店舗50軒を対象に聞き取り調査及びアンケート調査を実施し、37軒（74.0%）の回答を得た（第6表）。花崎町で最も開業年代の古い店舗は明治期の開業である。地元客向けの生活雑貨店の開業は1910から1950年代に多く、飲食店の開業は1970年代以降に多い。

営業時間は、土産物販売店や生活雑貨店と飲食店で違いがみられる。前者は、午前中に開店し、午後8時には営業を終了するのに対し、後者は午後8時以降も営業している。また、午後3時以降に開店する夜間営業中心の飲食店が6軒ある。これらの飲食店の多くは1990年代後半から2000年以降に開業している。

花崎町の店舗を利用する主な客層は地元客である。漬物やせんべいなどの土産物（食品）販売店でも地元客の利用が多い。主な客層が観光客である店舗は5軒にすぎない。一方で、花崎町には外国人の利用が多い店舗がみられる。外国人の多くは成田空港を発着する航空機のクルーで、成田に宿泊する場合に花崎町の飲食店を利用する。外国人の利用が多い店舗では、英語で書かれた看板やメニューを使用している。

花崎町の店舗では、店舗と自宅を兼ねる形態が多く、全体の半分を占める。これらの店舗は開業年代も古い。しかし、近年ではテナントが増加している。この土地や建物の所有者は、店舗の経営

第6表 花崎町における店舗の構成と形態（2009年）

番号	業種	開業年	営業時間		客層			店舗改装		所有形態	
			開店	閉店	地元客	観光客	外国人	改装年	理由	土地	店舗
1	飲食	1909	9:00	19:00	○			1961	老朽化	1	1
2	飲食	1953	11:00	20:00	○			1971	老朽化	1	1
3	飲食	1978	11:30	22:00	○					1	1
4	飲食	1982	11:00	20:30			○			2	2
5	飲食	1999	16:00	2:00			○			2	2
6	飲食	1999	17:00	24:00			○	2008	客席数増加	1	1
7	飲食	2000	17:00	1:00	○					2	2
8	飲食	2004	11:00	10:00	○					2	2
9	飲食	2006	11:30	22:00	○					2	2
10	飲食	2009	17:00	0:00	○					2	2
11	飲食	—	10:00	18:00	○			1985	業種変更	1	1
12	飲食	—	15:00	23:00			○			2	2
13	飲食	—	17:00	23:00	○					2	2
14	土・雑	2008	8:30	18:00		○				1	1
15	土・食	明治期	9:00	18:00	○					1	1
16	土・食	明治期	10:00	18:00		○				1	1
17	土・食	明治期	10:00	17:00		○		1963	老朽化	1	1
18	土・食	1930	9:00	15:00			○	2000	老朽化	1	1
19	土・食	1952	9:00	不定時	○					1	1
20	土・食	1953	8:30	18:00		○		2008	セットバック	1	1
21	土・食	2005	8:00	20:00	○					2	2
22	土・食	—	9:00	19:00	○			1976		1	1
23	衣料品	1938	9:00	18:30	○			1996	業種変更	1	1
24	衣料品	1973	9:30	18:30	○					2	2
25	生活雑貨	明治期	8:45	18:30	—	—	—			1	1
26	生活雑貨	1915	8:30	19:00			○	2008	セットバック	1	1
27	生活雑貨	1922	9:30	19:00	○					1	1
28	生活雑貨	1927	9:30	18:30		○		1973	老朽化	1	1
29	生活雑貨	1948	9:30	18:30			○			1	1
30	生活雑貨	1950	7:30	17:30	○					1	1
31	生活雑貨	1955	10:30	20:30	○					1	1
32	生活雑貨	1989	9:00	17:00	○					2	2
33	生活雑貨	—	9:00	18:30	○			2009	セットバック	1	1
34	生活雑貨	—	9:00	19:00	○					—	—
35	食料品	1938	9:00	18:30	○					1	1
36	サービス	1940	8:30	17:30	○					1	1
37	サービス	1951	8:30	20:00	○			2008	セットバック	1	1

注1)「土・雑」は雑貨を扱う土産物販売業、「土・食」は食品を扱う土産物販売業を示す。

注2)「—」は不明であることを示し、「(空白)」は該当しないことを示す。

注3)「客層」の「観光客」には、参拝客および参詣者を含む。

注4)「客層」の「○」は、主に利用する客層を示す。

注5)「所有形態」の「1」は自己所有、「2」は借地または借家であることを示す。

(聞き取り調査およびアンケート調査より作成)

者であった場合が多く、廃業後にテナントとして貸している。テナントは1990年代以降の開業で、その多くが飲食店である。土地、店舗ともに自家で所有する店舗は69.4%で、店舗の自家所有率は仲町、上町と比較して低い。

3) セットバックによる業種の変容

花崎町では2005年から段階的にセットバックが進められ、セットバックを契機に店舗の改装も行われている。現在のところセットバックに伴って業種が変化した店舗はないが、セットバックを契機に地元客向けの生活雑貨店から飲食店への開業

を予定している店舗もある。業種が変わると、店舗の営業時間も変わる場合がある。生活雑貨店や土産物販売店は午前9時頃から午後6時頃までが営業時間であるのに対して、飲食店は午前11時頃に開店し、午後10時以降も営業する。飲食店には、午後4時以降に開店し、夜間の営業が中心の店舗もある。前者と後者では営業時間に違いがある。まちづくりを先導するD氏およびE氏は、生活雑貨店や土産物販売店と飲食店の営業時間に違いが商店街の統一性を乱すことを懸念している。

V 新勝寺表参道におけるまちづくりと商業空間の変容

V-1 表参道における商業空間の変容過程

前章では、新勝寺表参道を構成する各町会における業種変遷と街づくりとのかかわりを検討してきた。以上を踏まえて新勝寺表参道における商業空間の変容過程を示したものが第16図である。

表参道の変容を時期区分すると、次の5期に分けることができる。

1) 門前町の成立期

18世紀以降、新勝寺の発展に伴い、新勝寺に近接した本町や仲町を中心に門前町が成立した。

2) 中心商店街期

明治期以降、鉄道の開通により東京からの日帰りが可能となったことで参詣客が増加し、成田駅と新勝寺を結ぶ花崎町や上町にも門前町が拡大した。上町や花崎町には参詣客向けの店舗の他に地域住民向けの店舗が展開し、明治期から1960年代にかけて成田の中心商店街となった。

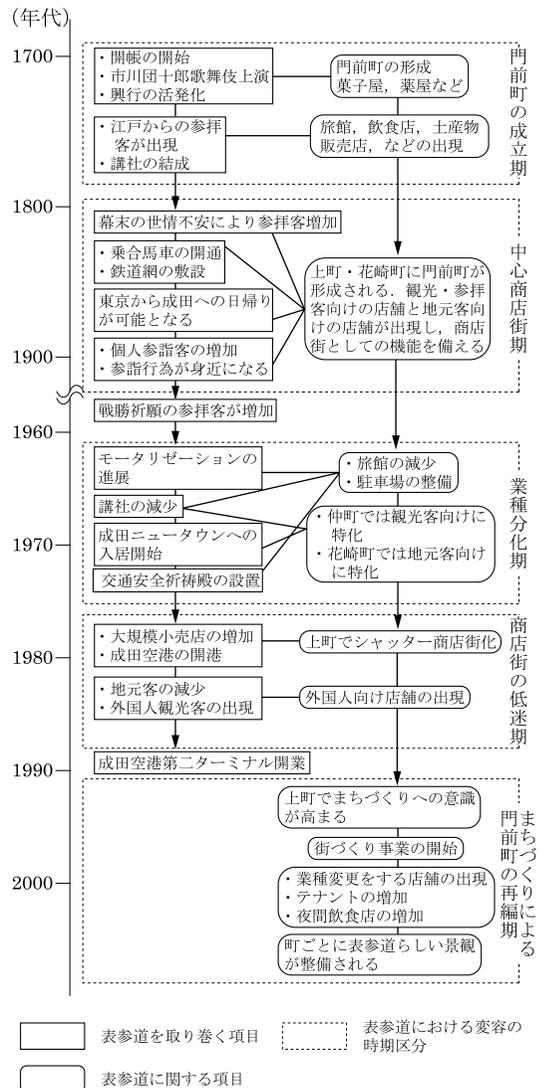
3) 業種分化期

しかし、鉄道の開業による参詣客の日帰り化は門前町の旅館の衰退を招いた。さらに個人での参詣が可能となったことで講社数も次第に減少し、旅館の衰退はより加速した。1960年代以降とくに旅館から飲食店への業種変更や土産物店の増加が

みられるようになる。

4) 商店街の低迷期

1980年代以降、大規模小売店が門前町を取り巻くように開設した。さらに1978年の成田空港の開設によって表参道沿いの店舗の後継者が空港関連産業に就職し、表参道では買回品を扱う店舗とくに新勝寺と成田駅の間に位置する上町での廃業が相次いだ。



第16図 新勝寺表参道における商業空間の変容過程

5) まちづくりによる門前町の再編期

商店街の維持に危機感を抱いた経営者は、商店街の維持のためまちづくりに着手した。上町では飲食店経営者が1990年に街づくり協議会を組織し、周辺の店舗や行政にまちづくりへの協力を呼びかけた。街づくり事業が目指したものは表参道沿いの外観の整備である。2000年から2003年にかけての電線類地中化事業、1996年からのセットバック事業およびファサード整備事業によって整備された表参道は参詣客や買い物客に印象がよく、隣接する仲町や花崎町へも拡大した。仲町では1996年からの伝統的建築物等修景事業によって伝統的な建造物が維持され、花崎町では成田駅と市川團十郎を意識したまちづくりが行われている。セットバック事業の進捗は店舗の業種変化の契機になっており、廃業した店舗のテナント化も見られるようになった。

まちづくりには、行政の支援も重要な役割を担っている。成田市は1987年から門前町の景観整備に取り組み、電線類地中化事業、セットバック事業、ファサード整備事業に対して各町の街づくり協議会に助成を行ってきた。事業開始当初は成田市の予算から事業費を捻出していたため実施内容に制限があったが、国土交通省の「まちづくり交付金」の対象になったことでまちづくりはさらに進行している。

門前町において、空店舗や空地はみられず、成田駅から新勝寺まで連続した商業空間を形成している。

V-2 街づくり事業による商業空間の変化

改めて表参道の変容の過程を俯瞰すると、1990年以降の街づくり事業による変化は、江戸時代からの表参道の歴史のなかで変化の一時点に過ぎないことに気づく。しかしこれまでは、幕末の世情不安、明治期以降の鉄道の敷設、大戦による世情不安とその後の高度経済成長、1960年代後半からのモータリゼーションの進展、1980年代以降の大型店の増加など、日本全体の社会・経済的な側面と関わりながらの変化であったが、1990年以降は、

行政の支援のもとに街づくり事業として行われたことにより、成田独自の変化を遂げた点で大きく異なる。1990年代以降とそれまでの変化の相異は、具体的には、以下の3点が挙げられる。①とくに上町や花崎町は、経営者の能動的な意志による店舗改装、業種変更ではないこと、②町内会単位で一斉に景観が変わること、③改めて「自分たちの町らしさ」を考えるきっかけとなったことである。

①は、セットバック事業を機に選択に迫られたケースが多い。まちづくりが行われなければ店舗改装や業種変更を行わなかった可能性のある店舗も存在する。テナントも同様に、セットバック事業がきっかけとなった例がある。これらを踏まえると、個々の経営者が客のニーズに合わせて店舗改装や業種変更を選択してきた形態とは性格が異なり、商業空間の変容を捉えるうえで重要である。一方で、セットバックに賛同していない経営者の存在も看過できない。セットバック事業に賛同していない経営者は、地元客向けの店舗を営む者に多い。これは新勝寺の門前町あるいは表参道としての意識より、商店街としての意識が強いと思われる。

②は、ファサード整備事業によるものである。ファサード整備事業によって造り出された景観は、白壁か黒壁に和瓦を敷き、和風看板を設置した店舗である。ファサード整備事業では、和風であることの指定にとどまり、特定の景観年代を志向したわけではない。しかし、行政側と住民との間で新勝寺の門前町らしさとして選ばれた景観であり²³⁾、街づくり事業の一環として一斉に施されている。このようにして類似した店舗が林立することとなり、表参道を構成する景観の大部分を彩る。訪れる客は、この店舗群が構成する景観を新勝寺の表参道の景観とみなし、新勝寺の表参道にいることを実感する。経営者の意思にかかわらず、一斉に類似した店舗景観に再編された点は、街づくり事業がもたらした影響といえる。

③は、街づくり事業は町単位で行うため、商店会を母体に新たに街づくり協議会を設立するなどして町のまとまりを強化させ、改めて「自分たち

の町らしさ」を考える場を提供した。上町のB氏が街づくり事業の開始にあたって町内の全店舗に赴き理解と協力を求めた点や、花崎町でアンケート調査を行ってまちづくりの方針を決めた点などにみてとれる。この結果、仲町は成立時期も古く、近世後期から明治期以来の建物も存在することから、まちづくりでも「伝統」を守る姿勢をとった。上町は1970年代以降の商店街の低迷に直面した経験から、客のために空間を整備する姿勢をとった。セットバックは客が歩きやすくするための道路拡幅であり、ファサード整備は客が門前町らしさを認識するための整備である。花崎町は、上町の景観整備に倣いつつも、さらに門前町らしさの演出として市川團十郎と新勝寺とのつながりを前面に押し出している。

仲町の姿勢は、上町・花崎町と比較すると消極的ではあるが、新勝寺への近接性から正月や新勝寺の行事の際、および成田市のイベント時に集客が見込めるためである。花崎町は、地元客向けや外国人客向けに特化するなかで、レクリエーションセンター²⁴⁾としての新勝寺をうまく活かして市川團十郎を用いたまちづくりを行っている点が注目できる。3つの町が造り出した景観に差異はあるが、一方で、藤本(1970)の指摘する「地元住民より外来者すなわち参詣者に対する機能を優先させ」ることには成功したといえる。

なお、成田空港の開設も間接的に表参道の商業空間の再編の要因となり、現在では外国人向けの店舗を含めて表参道の景観が構成されている。

V-3 表参道の一体感と各町の独自性

新勝寺の表参道を一体のものと捉えれば、商業空間の変容過程は第16図に示した5つの時期に分類することができる。しかし町ごとの性格を踏まえると、本質的には変化していない部分が見えてくる。そもそも3町は新勝寺や成田駅からの距離によって対象とする客が異なっていた。新勝寺に近い仲町では参詣・観光客向け、成田駅に近接する花崎町では駅前型の地元客向け、中間に位置する上町では参詣・観光客向けと地元客向けの店舗

が混在した商業空間を形成している。表参道を取り巻く環境の変化とともに、客のニーズに対応して業種を変えてはきたが、対象とする客は町の成立時から基本的には変化していない。

各町の対象とする客の違いは、成立要因に起因する。仲町は新勝寺との近接性から、新勝寺への参詣・観光客の増加とともに発展した。上町や花崎町にも参詣・観光客向けの店舗が開業するものの、商店街として発展するのは鉄道の敷設以降である。すでに仲町が新勝寺の門前町としても商店街としての機能も有していたため、後発の上町と花崎町には門前町を維持するための業種や、門前町の住民のための業種が展開した。坂口(1991)が示した「明治40年頃の私鉄成田駅前より門前通り迄の町並一覧表」に、上町には病院、呉服店、肉問屋、時計店、白米店など、花崎町には運送業、燃料店、理髪店、写真店、銀行などが立地する点からも見ることができる。また、明治期以前は上町と花崎町で台町という1つの町を形成していたこと、高齢の住民が現在も低地にある仲町、本町、田町、東町を「下町」と称し、坂の上にある幸町、上町、花崎町を「台」と称していること、1910年代に新勝寺と成田駅間に鉄道が敷かれる際に下町と台とで対立したことは重要である。すなわち表参道において、上町と花崎町の結びつき、仲町との相違が街づくり事業以前から既に存在していたことになる。さらに、町としてのまとまりの強さと他の町への対抗意識は、祇園祭にもみることができる。対抗意識は、自分の町の山車や屋台への誇りにも表れる。山車か屋台かの違い、囃子の違いの他に、それぞれが祀る人形も異なる。祇園祭は新勝寺の祇園会と同時季に行うものの、本来は別のものであり、新勝寺へ奉納するためのものではないことから、対抗意識が生じたものと思われる。

こうした町内での結びつきと町間関係は既に内在していたが、街づくり事業を契機に改めて認識されることとなり、町内の結びつきを強化させた。その結果、商業空間を再編するにあたって景観の差異を生んだ。約1kmの1つの通りのうち

にも個々の経営者ごとに、それを集約する町ごとに表参道としての立場や考え方が入り混じっていることを表している。しかし、まちづくりの完成が表参道の最終形に到達したことを示すわけではない。今後も新勝寺と成田駅には参詣・観光客や地元客が訪れ、成田駅と新勝寺を繋ぐ門前町の商業空間は今後も再編され、存続していくであろう。その際、経営者ごと、町ごとの事情を考慮しつつも、町内のみならず表参道としての一体感を強化させていくことが重要と思われる。

VI おわりに

本稿では、成田山新勝寺門前町の表参道における商店の業種変遷に焦点をあて、表参道で現在進行している景観整備事業とのかかわりを通して新勝寺門前町における商業空間の変容を検討してきた。本研究で明らかになった知見は以下のとおりである。

成田市の中心市街地の形成は新勝寺の表参道を核とする門前町を起源としている。門前町の変容過程を5期に区分することが可能である。18世紀初頭にはじまった成田山開帳と江戸歌舞伎・市川團十郎による信仰の流布もあいまって、成田山の不動信仰は急速に江戸庶民に浸透し、18世紀には新勝寺に近い本町や仲町を中心とする門前町が成立した（門前町の成立期）。

明治期以降、鉄道網の敷設により東京からの日帰りが可能となった新勝寺は参詣者が増加し、成田駅と新勝寺の途上に位置する花崎町や上町にも参詣者向けの店舗が立ち並ぶ表参道となり、1960年代にかけて中心商店街としてにぎわった（中心商店街期）。この時期には、参詣客や観光客にとって鉄道が成田山への主要な交通手段となり、新勝寺門前付近、成田駅前周辺、および駅と新勝寺を結ぶ参道沿いに門前町が拡大し、観光・参拝客向けの飲食店や土産物店などが増加した。門前町の伸張とともに、理髪店や時計店、銀行や病院など地元住民を対象とするサービス業も展開し、門前町とともに中心商店街としての機能が強化された

時期であった。

しかしながら交通利便性の向上による観光・参拝者の日帰り化の進展に加え、講社による集団参拝から個人参拝へという参拝様式の変化、モータリゼーションの進行に伴う動線の分散化などを要因として、新勝寺周辺の旅館は廃業もしくは飲食店・土産物店への業種転換を余儀なくされることとなった（業種分化期）。このような業種転換の動きは店舗の位置によっても異なる。新勝寺門前に近い仲町では観光・参拝者向けに特化した飲食・物販系の店舗への転換が進んだのに対して、成田駅に近い花崎町では、地元客を対象とした店舗への転換がなされた。一方で、その中間にあたる上町では、空店舗も発生し、一部でシャッター街化もみられた。

こうした業種転換の動きは、1978年の成田空港開港や1980年代以降の成田市周辺地域における大型店の開設などの外部要因によっても促進された。空港開設により、成田市周辺地域には空港関連産業が数多く進出し、就業機会が飛躍的に増大した。表参道に位置する商店街では、後継者世代の空港関連産業への就労が進み、後継者を失った店舗のなかには廃業を選択するものも少なくなかった。また大型店の進出により、地元買物客の購買行動も大きく変化した。駐車場の確保が難しい表参道では、モータリゼーションへの対応は限定的であり、買回品を扱う店舗は業種転換・廃業を余儀なくされていった（商店街の転換期）。

1990年代になると、こうした商店街の状況に危機感をもった経営者を中心として、まちづくり協議会が組織され、行政とともに街づくり事業が遂行された（街づくりによる門前町の再編期）。街づくり事業が当初目指したものは、表参道沿いのハード面の整備である。1996年から始まったセットバック事業およびファサード整備事業による外観の整備は、2000年以降、電線類の地中化事業に接合され、表参道としての景観の修景・創造が進められた。これらの景観整備にかかわる街づくりの事業の先導的役割を果たしたのは上町である。新勝寺と成田駅の中間に位置する上町は、仲町や

花崎町と比べて通過交通量が少なく、商店会としての危機意識がもっとも強い地区であった。セットバック事業やファサード整備事業には反対する店舗もあったが、2009年時点で約9割の店舗で両事業は完了している。この結果、歩道は拡幅され、表参道としての景観が整備された。来訪者の評判もよく、国土交通省による都市景観大賞を受賞（2005年）するなど、上町のハード面でのまちづくりは着実に成果を収めつつあるといえる。

上町に追随する形で、花崎町でも1998年に街づくり協議会が組織され、電線類地中化事業を契機に、現在セットバック事業とファサード整備事業が進行中である。これに対し、新勝寺門前に近い仲町では、ハード面でのまちづくりは電線類地中化など限定的であり、一方で門前町として先祖から継承されてきた“伝統”や“慣習”の継承を理念とするソフト面でのまちづくりへの志向性がみられる。木造3階建の重層な旧旅館をはじめ伝統を意識させる建物が残り、こうした伝統的な景観を有する門前町としての仲町のプライドは、とりわけ祇園祭において発揮される。先祖から受け継いだ山車を後代に継承し、町の精神やプライドを次世代に継承していこうとする意識は明瞭である。

このようにまちづくりの方向性は、同じ表参道であっても各町会によって異なるが、本研究で対象とした成田市の中心市街地は、門前町的な機能を残す町として、また商店街として商業・サービス業が機能し、中心市街地の空洞化が進行していない地区であると考えられる。このことは何よりも、講社による団体参拝は減少したものの、成田山新勝寺が有数の観光・参拝者をひきつける寺院であり、モータリゼーションが進展した現在においても、表参道の歩行者通行量が多いことが要因である。同時に空港建設を契機として、成田市および周辺地域には巨大なインフラ整備に投資がなされ、それらが豊かな雇用機会を創出し、首都圏50~100キロ圏に位置する地方中心都市として、恵まれた社会・経済的状况にあることも指摘されよう。

しかしながら新勝寺表参道の商業空間としての性格は、こうした外部環境に依存することによって成立・変容を遂げてきたものではない。そこには絶えず商業地域としての存続に対する危機感が底流にあり、内発的・自発的なまちづくりの取り組みがなされることにより、業種転換を図りながら、時代の変化に対応し、商業空間を維持してきたのである。

第一には新勝寺や行政との協業の成功である。新勝寺は江戸期から内部に信徒用の宿泊施設や飲食施設をもたなかったが、このことは門前町の成立には非常に重要な要因であった。参拝者は門前町で宿泊・飲食・購買を行うことにより、町は経済的に潤った。他方、新勝寺の側でも門前町の発展は互恵的な関係にあった。正月・5月・9月（正五九）に参拝者が集中する新勝寺の場合、これ以外の閑散期における観光・参拝者の増加は望ましく、表参道の旅館組合が主体となって設立された成田市観光協会は、新勝寺の参拝閑散期にイベントを開催し、集客の通年化を図るなどの集客の取り組みを行っている。門前町自体に訪問目的がある観光客もおり、こうした客が新勝寺に参詣することから、表参道の商店会と新勝寺は互恵的な関係にあるといえよう。

現在の成田市はニュータウン地区を含めて12万を超える人口規模であるが、表参道を核とする旧成田町の市街地がその中心にある。行政は街づくり事業を骨子とする当該地区の景観整備事業をサポートし、この地区を成田市中心部の顔として市街地の空洞化を防ぐ助力を行っている。景観の整備は観光効果と相乗して地区住民に表参道としての一体感や地元意識を醸成する因子としても機能している。

第二には、こうした時代の変化に対し、各町が独自に、またある意味で対抗的にまちづくりを進めてきた点も指摘される。上町・花崎町で進捗したセットバック事業は、個々の経営者の判断ではなく、いわば町会が厳しい経済状況のなかで判断して進められたものである。セットバック事業とファサード整備事業により、個々の経営者は店舗

改装を余儀なくされ、その際、業種変更や廃業をも含めた経営判断を求められた。こうした事業には当然のことながら、反対者も存在するものの、景観整備を通して、「自分たちの町らしさは何か」という成田市中心市街地のいわば、“場所の精神”の構築が図られることとなった。こうした一連の動きは、仲町と上町・花崎町では必ずしも同一で

はなく、むしろ各町会は祇園祭時にみられるような対抗的な意識を有している。しかしながら表参道地区として、ハード事業としての街づくりが議論され、徐々に展開していく中で、伝統が再帰的に意識され、商店街の景観は門前町、表参道としての表象が強化されることになったといえる。

本稿を作成するにあたり、成田市役所、成田商工会議所、成田市観光協会の皆様、および成田山新勝寺信徒部長篠崎義則様、成田山霊光館総務課長小倉 博様には大変お世話になりました。また、本町、仲町、上町、花崎町1区、花崎町2区の街づくり協議会の会長様および振興組合の組合長様、商店会の会長様には、ご多忙中にも関わらず貴重なお話を賜りました。さらに、表参道沿いの商店主の皆さまには、アンケートおよび聞き取り調査にご協力いただきました。添付の土地利用図の作成は、筑波大学技術職員の宮坂和人技官に依頼しました。記して深く感謝申し上げます。また本研究を遂行するに当たり、科学研究費基盤研究(A)19202027(研究代表者:田林 明)、同基盤研究(C)20520677(研究代表者:松井圭介)、同特別研究員奨励費21701(研究代表者:橋本暁子)の一部を利用した。

本稿の骨子は、人文地理学会2009年大会(於名古屋大学)において報告した。

[注]

- 1) 佐藤(1988)によれば、近世の成田村では1778(安永7)年から1845(弘化2)年にかけて芸能興行が行われ、開帳とともに人寄せの機能を果たした。
- 2) 成田山と市川家とのつながりについては、木村(2005;2006;2007)に詳しい。
- 3) 白土(1973)によれば、成田鉄道敷設は外部資本によるところが大きく、参詣客のみならず貨物輸送も目的としていた。
- 4) これらは深川における江戸出開帳の担い手であったという。
- 5) 浅草十講はその後衰退し、内陣五講および内陣十六講は本山へ参拝するようになった(篠崎, 2003)。
- 6) 1845(弘化2)年の「諸国講中記」を元に、近世から近代初期の講社の実態を明らかにした小倉(2005)によれば、幕末の動乱や明治維新など世情不穏から、1866年(慶応2)年から1870(明治3)年にかけて最も多く講社が結成された。
- 7) 代参とは、世話人などの代表者が成田山に参詣して、講員の分の護摩札を受け取ることである(小倉, 2005)。
- 8) 奉賛会は、1968年に本堂を建て替える時の資金集めを目的に組織された。本堂完成後は地域の支部としての講組織となっている。
- 9) ここには、存在はするものの活動は休止中の休講も含まれる。
- 10) 寺の住職(修業した人)が務める。宗派は真言宗でなくてもよい。
- 11) 堂ごもりをした人で、一般の職業に就いている場合が多い。
- 12) なお、成田山新勝寺史料集編集委員会編(2008)は、新勝寺境内と縁故地の奉納碑・記念碑および仏像類の銘文についてまとめたものである。講社および奉納者の詳細な分布、属性、年代などを分析することができる貴重な資料である。
- 13) 成田山仏教図書館には定宿記が所蔵されており、特定の講が参拝時に通るルートと利用する定宿が分かる。
- 14) 成田の表参道における外国人観光客の受け入れ体制を扱ったものに、大木(2006)の研究がある。

- 15) それぞれの収容台数は、成田市営第一駐車場47台、第二駐車場23台、第三駐車場14台である。これらは、もともと店舗であったが土地を手放す際に成田市が買い上げた。
- 16) 旅館組合の母体となったのは参光協会で、宿泊客の減少を食い止めるため1932（昭和7）年に設立された（成田市史編さん委員会編，1982，p688）。
- 17) 祇園祭の中心となるのは各町の20歳代から40歳代の若者で、町ごとに祇園祭のための若者の組織「若者連」がある。そのリーダーは「若者頭」と呼ばれ、御輿、山車、屋台の前に乗り音頭をとる。若者頭になることは名誉なことであり、その年の若者頭に選ばれた店舗では祇園祭時に垂れ幕を掲げる。
- 18) 成田市史編さん委員会編（1982）では、田町、幸町、囲護台、土屋が山車ではなく屋台であることから、山車が屋台かによる相違はないものと考えられる。なお、祇園祭の詳細については成田市史編さん委員会編（1982）に詳しい。
- 19) 近世から出開帳や参詣の講社によって江戸との結びつきが強かったことに由来するという（成田市史編さん委員会編，1982，p703）。
- 20) 例えば仲町では現在、山車は成田観光館に祭の写真や資料と共に常設で展示されているが、1989年に観光館ができるまでは町内の各家々の蔵に分担して保管され、祭の前に町内の人々が集まりそれらを組み立てていた。
- 21) FEEL 成田ホームページ、<http://www.nrtk.jp/>（最終閲覧日：2009年11月24日）。
- 22) 幸町は、江戸期には現在の上町の一部であったが、すでに明治期には横町として分離して存在した。幸町の名称になるのは1974年のことである。しかし、1970年の動態図には横町、1985年と1996年の住宅地図には幸町の境界が明確に示されていない。
- 23) もちろん、福田（1996）が指摘するように、こうして形成された景観は地域住民と行政の意志が絡み合って創造されたものである。ファサード整備のみならず、街づくり事業全体を通して住民にとってのアイデンティティが表出されたといえる。
- 24) 藤本（1970）は、成田のように大都市圏に位置する門前町は、参詣者にとっては門前町であるが、都市域住民にとっては宗教都市はレクリエーションセンターでもあるため、その両方の機能を果たすことに門前町の存在意義と発達があるとしている。

[文 献]

- 青野寿郎・尾留川正平編（1967）：『日本地誌第8巻 千葉県・神奈川県』二宮書店，p222-223。
- 浅香幸雄（1959）：信仰登山集落の形成（第1報）－木曾御嶽の場合－，東京教育大学地理学研究報告3：185-243。
- 浅香幸雄（1963）：富士北口の上吉田・河口の御師町の形態とその構造－信仰登山集落の形成第2報－，東京教育大学地理学研究報告7：55-82。
- 浅香幸雄（1968）：大山信仰登山集落の形成の基盤，東京教育大学地理学研究報告12：179-196。
- 有賀密夫（1971）：大山門前町の研究，地域研究14：17-28。
- 有賀密夫（1972）：出羽三山を中心とする山麓登拝集落，地域研究16：37-42。
- 有賀密夫（1974）：富士山を中心とする山麓信仰集落，地域研究21：12-25。
- 安藤 清（2003）：国際空港の夢と現実 成田市，寺阪昭信・平岡昭利・元木 靖編『関東Ⅰ 地図で読む百年』古今書院：103-108。
- 旭 照愿（2005）：成田山門前の変遷，法談（成田山新勝寺）50：31-44。
- 市原善衛（1999）：『成田の文学散歩』文芸社。
- 岩鼻通明（1992）：『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』名著出版。
- 岩間信之・佐々木 緑・大橋智美・駒木伸比古・米澤郁人・F. アマディ ネジャド（2004）：古河市における商業構造の再編とその要因，地域調査報告26：41-74。
- 大木美佳（2006）：成田門前町表参道商店街における外国人観光客の誘致，地理学研究報告17：88-90。
- 小倉 博（2005）：江戸時代の成田山の講社について－弘化二年の諸国講中記を中心に－，成田市史研究

29：14-26.

- 角川日本地名大辞典編纂委員会編（1984）：『角川日本地名大辞典12 千葉県』角川書店。
- 兼子 純・山下亜紀郎・豊島健一・高橋珠洲彦・川瀬正樹・高橋伸夫（2002）：水戸市中心市街地における商業地域構造と地域活性化。地域調査報告**24**：1-31.
- 兼子 純・新名阿津子・安河内智之・吉田 亮（2004）：古河市における中心市街地の変容と都市観光への取り組み。地域調査報告**26**：123-150.
- 川瀬正樹・村山祐司・藤永 豪・渡辺康代・岩間信之・兼子 純・鄭 美愛・田中耕市（1998）：常陸太田市における商業地域構造の変容。地域調査報告**20**：1-42.
- 川辺春光（1991）：成田の町並みとくらしー坂口武年氏の口述をもとにー。成田市史研究**15**：69-73.
- 木村 涼（2005）：成田山新勝寺における奉納芝居の一考察ー文政二年六月市川団十郎興行を素材としてー。法政大学大学院紀要**55**：210-199.
- 木村 涼（2006）：成田山新勝寺における勧進興行の一考察ー文政七年七月市川団十郎興行を素材として。千葉史学**49**：35-55.
- 木村 涼（2007）：七代目市川団十郎と成田山新勝寺の江戸出開帳。芸能史研究**179**：19-34.
- 駒木伸比古・李 虎相・藤野 翔・山下清海（2006）：都市システムからみた九十九里地域における茂原市の中心性とその変容。地域研究年報**28**：1-23.
- 坂口武年（1991）：明治四十年頃の成田の町並み図。成田市史研究**15**：68。（修正図を成田市史研究**16**に掲載）
- 佐藤康子（1988）：門前町成田と芸能興業。成田市史研究**12**：23-43.
- 篠崎義則（2003）：成田山講社と定宿。法談（成田山新勝寺）**49**：78-88.
- 白土貞夫（1973）：成田鉄道の建設とその背景。成田市史研究**2**：11-22.
- 鈴木道郎（1966）：明治初期における相模大山御師の経済生活。地理学評論**39**：656-664.
- 大本山成田山新勝寺信徒部（1972）：『成田山講社・奉賛会名簿』大本山成田山新勝寺信徒部。
- 田中啓爾（1933）：門前町（信仰集落）としての成田町。田中啓爾『地理学論文集』499-515。古今書院。
- 高橋伸夫・小野寺 淳・松村公明・舩杉力修・芳賀博文（1994）：石岡市中心部における都市空間の特性。地域調査報告**16**：1-23.
- 千葉県史料研究財団編（1999）：『千葉県の歴史 別編 地誌2 地域誌』千葉県，p482-493.
- 成田山新勝寺史料集編纂委員会編（2008）：『成田山新勝寺史料集 別巻』大本山成田山新勝寺。
- 成田市観光協会編（2008）：『成田のガイドブック』社団法人成田市観光協会。
- 成田市史編さん委員会編（1976）：『成田市史近現代編史料集五上門前町Ⅰ』成田市。
- 成田市史編さん委員会編（1982）：『成田市史 民俗編』成田市。
- 成田市史編さん委員会編（1986a）：『成田市史 中世・近世編』成田市。
- 成田市史編さん委員会編（1986b）：『成田市史 近現代編』成田市。
- 新名阿津子・原田典子・田上健一・小林達也（2006）：茂原市における中心商店街活性化への課題。地域研究年報**28**：25-60.
- 新名阿津子・鈴木富之・濱田紗江・林 幹大・山本倫芳（2008）：筑西市下館地域の商業特性・商業地変容と菓子製造販売業の活動分析を通じて。地域研究年報**30**：161-179.
- 西村 壇（2000）：成田山新勝寺の表参道における土産物店に関する一考察。地理学研究報告**11**：113-115.
- 原田伴彦（1957）：戦国時代前後の諏訪門前都市集落。原田伴彦『日本封建都市研究』東京大学出版会：257-277.
- 福田珠己（1996）：赤瓦は何を語るかー沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動ー。地理学評論**64A**(9)：727-743.
- 舩杉力修（1998）：戦国期における伊勢神宮外宮門前町山田の形成ー上之郷を事例としてー。歴史地理学**189**，1-22.
- 普及版成田市史編纂委員会編（1994）：『図説成田の歴史』成田市。
- 藤岡謙二郎（1948）：寺内町の研究。人文地理**1**：1-47.

- 藤本利治（1968）：宗教都市の歴史地理学的研究の諸問題。皇学館大学研究紀要**6**：143-170.
- 藤本利治（1970）：『門前町』古今書院.
- 松井圭介（1993）：日本における宗教地理学の展開。人文地理**45**：515-533.
- 村山祐司・堤 純・草原 輝・伊藤徹哉・山田義尚・北村 章（1996）：結城市における商業地域構造の変容。
地域調査報告**18**：45-65.
- 山田道人（1987）：成田市における門前町の変容－田中啓爾の論文と比較して－。地理**32**(9)：105-111.



第17図 明治期の長谷川呉服店
(国書刊行会編 (1986) より転載)



写真6 現在の長谷川呉服店
(2008年10月 橋本撮影)



第18図 明治期の大野家旅館
(国書刊行会編 (1986) より転載)



写真7 現在の大野家旅館 (重要保全建物)
(2008年頃 大野卓三氏撮影)



第19図 明治期の三橋薬局
(国書刊行会編 (1986) より転載)



写真8 現在の三橋薬局 (重要保全建物)
(2009年5月 橋本撮影)



第20図 明治期の木内薬局
(国書刊行会編 (1986) より転載)



写真9 現在の木内薬局 (重要保全建物)
(2009年5月 橋本撮影)

(町名)	(店名)
------	------

成田市新勝寺門前町の商業環境に関するアンケート調査

筑波大学大学院 生命環境科学研究科 人文地理学研究グループ
 教員 田林 明・山下清海・松井圭介・井口 梓
 大学院生 橋本暁子・齋藤譲司・亀川星二
 西田あゆみ・津田憲吾

ご記入いただいた内容は、学術研究目的以外に用いることはありません。また個人情報の保護に関しては細心の注意を払い、個人情報が出ることはありません。お忙しい中、大変恐縮ではございますが、何卒ご理解の上ご協力くださいますようお願い申し上げます。

質問でご不明な点がありましたら、空欄でも結構です。また年代等につきましても、詳細が不明な場合は大まかな値で結構です（例 1980年代、90年代前半など）。

この調査についてのお問い合わせは、以下までお願いいたします。

●● ●● (-----) ○○○-△△△△-□□□□(携帯電話)

問1 店舗についておたずねします。

- (1) 業種（取扱商品等）についてお答え下さい。()
- (2) 通常の営業時間をお答え下さい。 開店（ : ） 閉店（ : ）
 *営業時間を変更される時期がありましたらお答え下さい。
 時期（ ） 開店（ : ） 閉店（ : ）
 変更理由（ ）
- (3) 店舗の土地所有、店舗所有についてお答え下さい。
 土地所有 1. 自己所有 2. 借地
 店舗所有 1. 自己所有 2. 借家
- (4) 従業員の方についてお答え下さい（経営者の方も含む）。
 従業員数（ ）人
 内、家族従業員数（ ）人 雇用従業員数（ ）人
- (5) 支店等がありましたらお答え下さい。
 支店の場所（ ）
 支店の開業時期（ ）
 支店の開業理由（ ）
- (6) 現在の店舗を開業された年についてお答え下さい。
 ()
- (7) 開業の経緯や理由についてご記入下さい。
 ()
- (8) 開業される直前、店舗が何に使われていたかをお答え下さい（空き店舗、住宅など）。
- (9) 店舗の移転などがありましたら、お答えください。
 移転時期（ ） 移転前の場所（ ）
 移転理由（ ）
- (10) 業種や取扱商品等の変更がありましたら、お答えください。
 変更時期（ ） 変更前の業種など（ ）
 変更理由（ ）
- (11) 店舗の改装（店舗の増築や景観整備等）がありましたら、お答えください。
 改装時期（ ）
 改装内容（ ）
 改装理由（ ）

問2 来店される方についておたずねします。

- (1) 来店される方の客層についてお答え下さい。
主に来店される方 1. 成田市などの地元の方
2. 市外や県外などからの観光客
3. 外国の方
来店される方の主な年齢層 ()
- (2) 来店される観光客の方についてお答え下さい。
観光客の方が店舗の売上げに占める割合 () %
*観光客の方の来店や売上げについて、時期(正月や季節など)や時間(早朝や夕方など)によって増減がありましたらご記入下さい。
()
- (3) 来店される外国人の方についてお答え下さい。なお、外国人の方がほとんど来店されない場合は、問3にお進み下さい。
来店される方のうち、外国人の方の割合 () %
外国人の方は、どのような方が多いかについて、[]に多い順に番号をご記入下さい。なお、ほとんど見られない方については、×をご記入下さい。
1. 航空機のクルー・キャビンアテンダント [] 番目
2. 旅行者 [] 番目
3. ビジネス客 [] 番目
外国人のうち、アジア系の方と欧米系の方の比率
アジア系 : 欧米系 = () : ()
ここ数年間で、外国人の方の数や国籍などに変化がありましたらご記入下さい。
()
外国人の方は主にどのような商品を購入されるかについてお答え下さい。
()

問3 経営者の方についておたずねします。

- (1) 経営者の方の年齢、性別についてお答え下さい。
() 歳 男・女
- (2) 経営者の方が居住されている場所についてお答え下さい。
1. 店舗に隣接(店舗兼住宅) 2. 門前町 3. 成田市(門前町を除く)
4. 千葉県内() 5. 千葉県外()
*4, 5については、市町村(都道府県)をご記入下さい。
- (3) 店舗の後継者の有無についてお答え下さい。 1. 有り 2. 無し 3. 未定
- (4) 後継者の方がいらっしゃいましたら、お答え下さい。
後継者の方の年齢、性別 () 歳 男・女
経営者の方との続柄 1. 子ども 2. 子ども以外の血縁
3. 店舗の従業員 4. その他 ()

問4 商店会の活動等についておたずねします。

- (1) 所属されている商店会名についてお答え下さい。()
- (2) まちづくり協議会への参加の有無についてお答え下さい。 1. 参加 2. 不参加
*参加されていたら、参加時期についてお答え下さい。()
- (3) イベント(祇園祭など)の際に、行っていることがありましたらご記入下さい。
(例 出店を出す, 山車に参加する, 実行委員を務めるなど)
()

アンケートは以上になります。ご協力いただき、ありがとうございました。

() 月 () 日 () 曜日 () 時頃 () が回収に伺います。